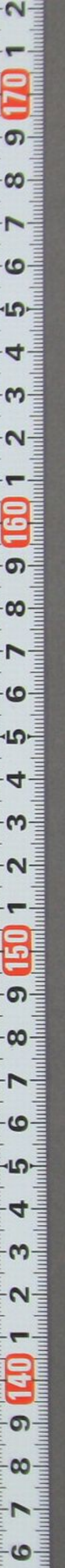


市島春城貼江帖

SECTION
SCRAP BOOK

PAT APD. NO.2606 DES APD. NO.1550

O.T.S. NO. 75





	頁數	切拔紙名	題	目
	頁數	切拔紙名	題	目
	頁數	切拔紙名	題	目

土地の者で入學するものは
幾人もなかつた。乃で知事は、
縣廳の役人の子弟などを勧誘して、
學科を修めしめた。

出ても、誰か結果であつたのを
共、不馴な帽子をかきかせる
激烈なる變化を興へた。

りても、僅かに二、三十名の生徒であつ
たのに、僅かに二、三十名の生徒であつ
たのに、僅かに二、三十名の生徒であつ

楠本
向地
大

楠本縣令の雄断
學校の隆盛

却、縣令は新海の極端なる若船の村上
まで赴いて、その時、
士藤虎五郎氏の父、近藤金彌といふ

劃が二十數大區に分れてゐたが、各區に
命令を傳へて、必らず區費を以て、若干
の學生を是非新海へ出せといふ訓令を出

大
長
向地
大

何時で出頭せよといふ事である。勿論、此南八番も追々狭くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所にあたりである。何しても學校の爲めに特に設けた場所でないから、

此南八番も追々狭くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所にあたりである。何しても學校の爲めに特に設けた場所でないから、

首藤時代の教育方針は謂はゞ變則流であつて、譯讀が主であつた。唯だ書物さ

6 quartich
Fe

當時は極めて程度の低いものであつて、
此人の素性は能く分らぬが、如何にも
人格の低い人で、又教へ方も餘り上手で

切り付けた跡が在してゐる、乃で大騒ぎ
となつて、縣廳でも外人を刺殺するな

れが、教へ方は能く上手な人であつた
此モスが學校に聘せられて以來、學校も

變則流より
正則流

かへ移す事となつて、暫時廣小路上の勝樂寺へ移つた、此移つて来た間が半歳位のものであつたらうか、モ一學校も大分大きくなつて来た譯で、茲に初めて學校新築の議起つて、白山浦に元米屋の多く列んでゐる處を掘り、その米屋を潰して茲に初めて新築をやつた、その落成までは此勝樂寺にゐたのである。

新潟學校傳

本校の建築と分校の設置其他

今までは町會、所や或は奉行の官舎などを學校に應用した譯であるのに、此度は特に手廣の建築をした譯であるから、茲に初めて堂々たる學校の面目を現して前に比ぶれば實に月窟の差を生じた、此時分に學校の徽章も定まり旗にも學生の帽子にも鷲を交したものが付いた、その時分の知事は、橋本正隆で、學長は二橋元長、その下に校長といふものが置かれ、それが橋口正弘といふ人で、此

せに屏風を立て廻して、そこに幹事室や事務室が置かれて、他の各室が校室に當てられ、庫裡が食堂に充てられ、膳所は本堂の鼻口の片側に假にバラック様のものを作り、其處で炊事をやらうとした、宛で戦でも行つたやうな校庭で、頗る舞臺を極めた、併し新築な雜沓の間にも、教授は常の如く進行してゐた、新築にしてゐるうちに、白山浦の新築も出来上つたので、茲へ移つたが、此學校が出来てから初めて新潟學校といふ名稱を付けたのである。

Fl. 8

柏崎に定められ、新潟へ來り學ぶ能はざるものは、皆此分校に學ぶこととなつた分校の事に就ては、詳しくは知らぬが、併し幾何かの事は、後にいふ事にして、新潟學校(本校)のその教へ方なごに就て、少しく御話せん、いふまでもなく、此時分の教育の組織といふものは、丁度中學程度といふ形のものであつて、無論専門の學科を主とするものでなかつた、中學程度といふのであるから専ら英語を主として傍ら洋算に力を込めたものである。

六 教師に關する
以上は主に正則の方面の事であるが、前述の教頭の位置にある梅浦といふ人は専ら上級の學生並びに教頭以下の教師を二、三の組に分つて、譯讀を授けた、それは輪講の方法で教へたのである、その時分せんものを輪講の書物としたかといふ、今では廢つたが、ウエランドの倫理書、經濟書などが、その時分で行つて、是等が最高級の本であつた、其の外にギブズの文明史、ミルの經濟書、クワッケンボウの究理書などがあ

新潟學校傳

教師に關する

Fl. 8

つた、梅浦教頭は、梅浦の外に、自ら文章を書いて(時文)それを英文に譯させる事なまや、或は外國の新聞の或る部分を分刷して、之を各々に翻譯させるといふ事も努めた、而してその各々から出した翻譯を纏めて、書き直す人がその級の中にあつた、それは今も、その頃、又達者に書くといふ處から、此人が讀書を積んだ、と云ふ事、

梅浦教頭が筆を入れた、扱て又それが何うなるかといふ事、當時の新聞は小型の未だ幼童の域にあつたが、之に寄稿することが例であつた、それが爲めに自分なごの譯したものが、月に二度や三度新聞に現はるといふ譯で、酷く獎勵になつた様に思ふ、今日に於ては、新聞に文章を載せるなごいふ事は、誰でもやる事で、餘り譽も思はない事であるが、その時分は自分の筆になつたものが、新聞に載るといふ事は、學生としては強く面目に思つたものである、隨つてそれに載るといふ事が

例へば十圓位の俸給を受くべきものが、自分が教はるといふ方から、三圓許りを引いて七圓位の俸給を受けて、居るといふ様なものであつた、何んでも新潟學校なる以前の教頭以下の句讀師なご、十圓位のものに過ぎなかつた様である、新潟學校と改るに及んでは、句讀師の名も廢せられて、何んといふ名が付いてゐたか、忘れたが、謂はゞ今日の教員といふ様な名義で、諸方より多くの人達が聘せられて、十數人の教員が備つた、是等は矢張り或る二、三の取除けの外は、皆教頭に就て、一面には教を受けた、その取除けといふのは、例へば數學の教師の如きは、唯だ自分が教師を務めるといふだけで、教を受けなかつたのである、教師には何な人が来たかといふに、前にもいふ通り、知事が大村藩であるといふ關係、大村から土屋廣次といふ人が来てゐた、それからその時分の縣の知事の次の人で、松平正直といふ人が来てゐた關係より、その人は福井であること

松平正直、松平誠、津田東、武藤風六、それから福井の人であつたと思ふが、數學の教師で高橋貞一、それから長岡からは、佐野洪藏なごいふ人が来てゐた、随つて新潟學校となる以前の所謂句讀師といふものは、何んな人であつたかといふに、中川忠太郎、石澤兵吾、三浦方、長谷川寛治等の人があつて、是等の中には、新潟學校となつても、尚ほ繼續して所謂助教といふ様な格で、教務に與つた人もある、

新潟學校時代の舊談(七)

七久保氏の談話

それから分校では新發田に久保扶桑氏、長岡柏崎に小嶋鉄三郎、藤井三郎、此人々が教頭になつて来たのであるが、此二

人の中孰れが柏崎であり、孰れが長岡であるといふ事は、一寸自分には覺わかない、兎に角是等の人が聘せられて来た譯である、乃で長岡から出た上級生として知られてゐるのは、故人となつた波多野傳三郎、今の首座學校長たる小西信八郎なごである、

久保氏が新發田へ来て教頭になつた頃、の事に就て、久保氏は次の如き興味ある話を語られた、自分は實は東京に於て北海道へ出懸けて、何か一つ事業をやりたいといふ考へで、自分の後の事は皆岡山翁吉氏に託して僅か許りの旅費を以て北海道へ行くと、越後を経て行く方が近道であつたので、先づ越後を志して、東京を發すると、前橋に着いて、病氣に罹つて、多くもない旅費が、殆んど盡くるに重んじて、病氣が癒つて、やつこの事に新潟へ着いた時は

豫中僅かに金一朱を餘すのみであつた、その時分新潟の師範學校に平井といふ友人があつて、それを使って、相談をしようと思つて見ると、生憎その日は不在であつた、據らなく何處かに旅宿を求めて出た、處で全く無一物になつてしまつたが、幸ひに翌日平井に會つて見ると、平井のいふには、北海道へ行くな、敢て止める譯でないが、兎も角も出懸けるに就ては、少しは金も持て行かねばなるまいから、先づ基礎を作る爲め、暫らく越後に足を止めては何うかといふ、而してその積りなら、新潟學校へ世話するといふので、自分も己むを得ずその氣になつて梅浦の世話で、新發田の分校の教頭になる事となつた、その時分自分は役人といふ資格でなく、所謂御用掛といふ格で、縣廳との條約の如きは宛かも外國人を備ふ場合と同じ様な約束のりかわせをして、乃で新發田分校の教務に與つた、新發田には二年許りも足

を止めたであらうと思ふ、その後に山盛陣といふ人が知事になつて来てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭してゐる。山盛陣は陽謀陰謀を講じて奉書に書いた評言書を之居なきにある様に、隻手に書く捧けて、恭々しく自分に渡したのを即座に開いて見ると、是は自分を役人扱にする事に改めてイクラが俸給を増して、伯崎の分役へ轉任せしむる評言であつた。全体自分は役人になるつもりはないので初めそれが爲め外人と同じ様な條約をとりかわした譯であるのに、餘程相談もなく、突然役人扱にする事に對して憤りに際つたから、評言書を見るに直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言ひ出したら、わきに座してゐた田沼がまあ、兎に角御交なさいといふて、頼りに宥めた、併し自分はその時から厭になつて遂に辞める事に決心をした、新發田を拜するに當りて、その時自分世話をした學生の中に市場家の子弟、佐藤伊左衛門、須貝四平、白勢家の子弟

(白勢和一郎)なきを世話をし、此兩富家私に向つて、何うか私共で貴方を世話するから長く越後に止つて貰ひたいといふ勸告もあり、自分も一時はその氣になつたが、東京の友人達が歸京を勧めるので、遂に引上る事になつた。斯様な話で幾何かその當時の模様も察せらるゝ。(未完)

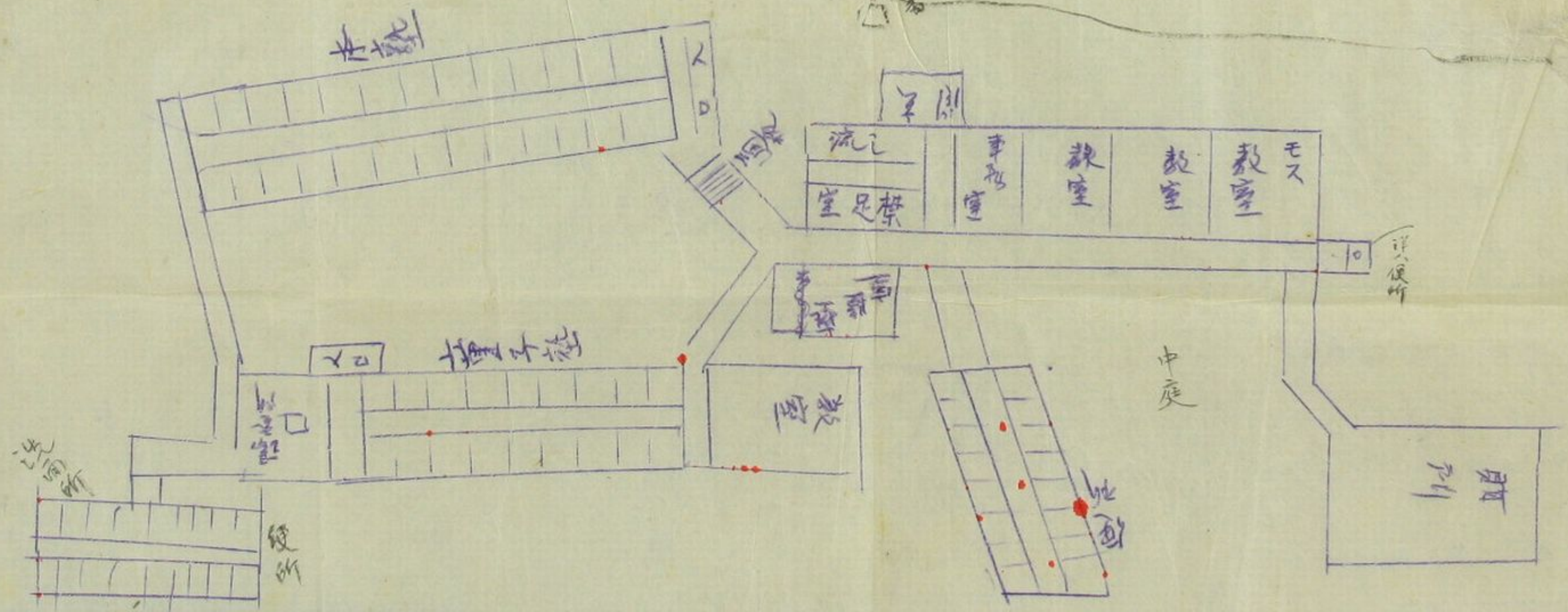
新島 八△當時同窓の人々

當時の新島學校の構造に就ては、何れ新島縣廳にその圖は残つてゐるやうが、今は他にその圖を求めても、絶対に之を得ることが出来ぬ、併し語の序で大體何んな風なものであつたかを粗雑ながら茲に現はして見たいと思ふ、舊い事であるから、とても正確に現はすことなどは、思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ左の如きものであつたと思ふ

位な室が凡そ五十位もあつたであらうが、丁度今の病院の病室の如き趣があつた、此寄宿舎に學生の渡泊してゐた事は勿論、遠方から來てゐる教員も亦寄宿舎にゐるものであつて、その人達は房長といふ様な有様で、他の寄宿生を監督してゐた。自分兄弟は未だ兩八番頃には、新島の醫界に名譽ある長谷川寛一氏の室に居り、それから會津の人の秋一雄の室にも居り、新島學校時代には、新島市列羽の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室に居た事もあるが、是等の人は年配も學問も先達であり、房長として監督したといふのみでなく、頗る親身に尋問其他の事に就て指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

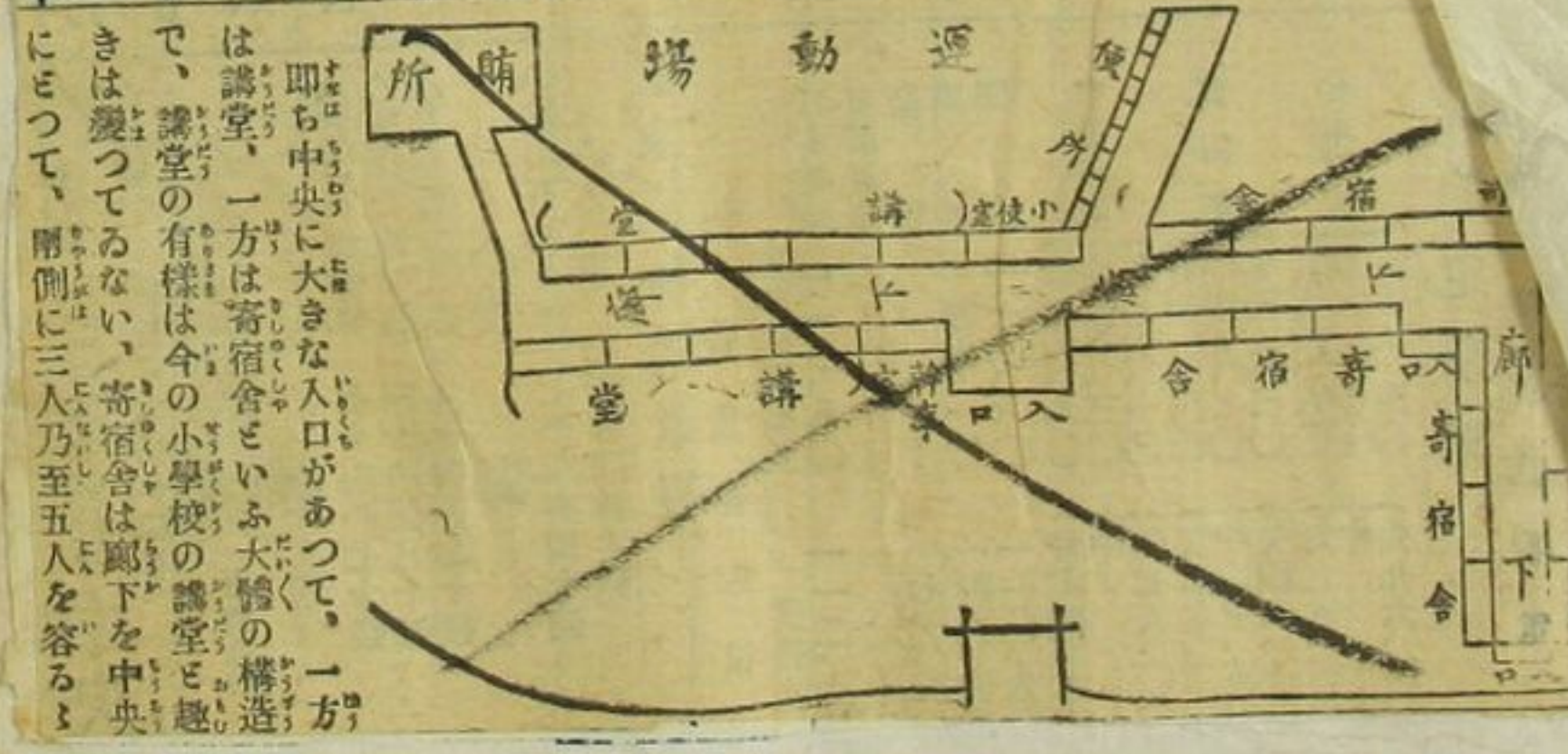
新島學校時代に如何なる人が、就學せるかを考へるも今に於て興味ある事であるが、唯だ遺憾な事には、その時分の名簿が殆んどなくなつてゐる爲めに記憶してゐる人々の名が甚だ少ない、唯だ思ひ出づる處より人々の名を擧げて見るに

古田三三、此兩人は極めて秀才であつて、常に自分と首席を争ふた人々である、それから大竹貫一氏、高橋三三氏、小林善四郎氏、内藤久寛氏、神吉彌氏は等の人々も矢張りその時代、今の新島市の實業家中には、徳次郎、栗林貞吉、荒川才一、小山長兵衛、是等の人々も矢張り同時にゐたのであるが、勿論般は皆それと異つてゐた、まだ幾人が記憶してゐるが、さうも今では、性を覚えてゐても名を忘れたものも覺れてゐても性を忘れてゐる、中に申述ぶることは甚だ困難である、曾て東京にその時分の同窓會を催した事があつた、それは己巳年、本年前の晩年に



を止めたであらうと思ふ。そうすると橋本が東京に去つて、その後山登輝といふ人が知事になつて来てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭してゐる。山登輝は縣廳に召喚されて奉書に書いた評合書を芝居などにある様に、後手に書く癖が、恐らく自分に渡したのを即座に開いて見ると、是は自分を役人扱にする事に改めてイクラか俸給を増して、柏崎の分校へ傳任せしむる評合であつた。全体自分は役人になるつもりはないので、初めそれが爲め外人と同じ様な條約を、いりかした譯であるのに、後め相談もなく、突然役人扱にする事に對して痛に障つたから、評合書を見る直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言ひ出したら、わきに座してゐた田沼がまあ、兎に角御愛ささいといふて、頼りに有めた、併し自分はその時から厭になつて遂に辞める事に決心をした、新發田を尋するに當りて、その時自分が世話をした學生の中に市嶋家の子弟、佐藤伊左衛門、須貝四平、白勢家の子弟

八△當時同窓の人々
 當時の新潟學校の構造に就ては、何れも新發田にその圖は残つてゐるやうが、今は他にその圖を求めても、絶対に之を得ることが出来ぬ、併し話の序でに大體何んな風なものであつたかを粗雑ながら茲に現はして見たいと思ふ、舊い事であるから、とても正確に現はすことなどは、思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ左の如きものであつたと思ふ



即ち中央に大きな入口があつて、一方は講堂、一方は寄宿舎といふ大體の構造で、講堂の有様は今の小學校の講堂と趣きは變つてゐない、寄宿舎は廊下を中央にとつて、兩側に三人乃至五人を容るゝ

位な室が凡そ五十位もあつたであらうが、丁度今の病院の病室の如き趣があつた、此寄宿舎に學生の寢泊りしてゐる事は勿論、遠方から來てゐる教員も亦寄宿舎にゐるものであつて、その人達は房長といふ様な有様で、他の寄宿生を監督してゐた、自分兄弟は未だ南八番頭には、新潟の醫界に名譽ある長谷川寛一氏の室に居り、それから會津の人の萩一雄の室に居り、新潟學校時代には、新發田の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室に居た事もあるが、是等の人は、年配も學問も先輩であり、寧ろ房長として監督したといふのみでなく、頗る親身に身問其他の事に就て指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

新潟學校時代に如何なる人が、就學せらるかを考へるも、今に於て興味ある事であるが、唯だ遺憾な事には、その時分の名簿が殆んどなくなつてゐる爲めに記憶してゐる人々の名が甚だ少ない、唯だ思ひ出づる處、人々の名を擧げて見ると

理學博士藤澤利喜太郎氏なども學校の創始時代にゐるのであるが、是はズット奮いから自分はその頃の事は知らない、自分の競争者として、今猶ほ記憶してゐるのは、宮内省の侍醫から賣場を買つてゐた、古田三三、此兩人は極めて秀才であつて、常に自己と首席を争ふた人々である、それから大竹實一氏、高橋邦三氏、小林善四郎氏、潮吉彌氏は等の八人も矢張りその時代にゐた、今の新潟市の實業家中には、健富、徳次郎、栗林貞吉、荒川才二、小山長作、是等の八人も矢張り同時にゐたのであるが、勿論彼等は皆それと異つてゐた、未だ幾人か記憶してゐるが、さうも今と異つては、性を覺はせても名を忘れたり、名を覺はれても性を忘れたりして、茲に申述ぶることは甚だ困難である、會て東京にその時分の同窓會を催した事があるが、それは二十五年前の既に往になつたが、備々今の内務省技師の近藤虎五郎君の殿父、金彌老人(當時の幹事)の出席せられたのを機として、今の橋本男爵、梅浦精一氏などを招いて、二十人許りの人が會合した事があつた、何にしても三十年振りであり、殆んど初めて出逢ふやうな譯であるから、昔互に知り合つてゐる面々も、互に出逢つてゐる、自分は比較的是等の八人と度々會つてゐるといふ様な事から、紹介者となつて、是は誰、是は誰といふて紹介してゐる、是の引合せられた人々は、殆んど呆然として驚く顔を見せられて、漸くにして理解が付く、成程それと違ひないといふ有様で、甚だ奇觀を呈した、何うも此時分の人達は多く集合するといふ事は、今日に於ては甚だ困難である、その集會の席に在りて、なほ舊談が出て、甚だ興味を感じたが、考へてみると、隨分舊い事であつて、近藤博士などは、吾人よりも遙かに年若く、その時分は未だ

母晩宿舎に嚴父の近隣老人に抱かれて
寝てゐたといふ様な有様で、そんな舊夢
談も起つて、皆一度は近藤老人に叱られ
た面々であるから、それ等の失敗談を口
々に語り出で、打興じたのである。

九 後の新瀉學校

明治八年に至りて補本聯合は東京府知
事に轉じ、梅浦校長は内務省の勸業寮に轉
じた、唯だ外國人モスは九年頃まで止つ
てゐた様である、梅浦の去後、後には、會
社人で阪井正義といふ人が來たが、此人
は學殖足らざる爲め間もなく排斥せられ
て去り、それに代りて、縣廳に一等譯官
となつて來、學校の教頭を兼ねた人は
工藤助作といふ人で、之は確か弘前の人
であつた、無論永山知事の時代である、
之より先き確か明治六年と思ふが、全國

に文部省が英語學校を起すといふ事とな
つて、全國を六大學區に分ち、六ヶ所に
英語學校を置かれたが、新瀉も亦置かれ
た、是に於て二ヶの學校が並立する事とな
つて、新瀉學校からも幾何の學生が英
語學校の方へ轉じた、併し新瀉學校は依
然として成立してゐたのである、唯だ新
瀉學校が進々年を経るに従つて、多少の
變化を生じた譯は、當時遊學してゐた連
中のうちの子供許りでなく大分年配の連
中である人が、少つたりで、學問の方
針に關して一時議論が沸騰した、その要
領は如何といふに、唯だ西洋の語學許り
研究してゐるのでは、身を立てる方法
としては不完全である、何等か職業を得
る學問をするに非れば將來活路を得るに
困難であるから、宜しく學校に二、三の
専門の學科を置くべしと斯様な議論が一
方になり、之に對して専門の學科は各々
志す處に依りて東京に至りて學ぶべし
此學校は専門の學科を修むる標榜にして
置けば可なりといふ二種の議論が、互に
闘つた結果、學校でも考へ、結局兩

方の議論を折衷して、茲に二つの學科を
分けて置く事になつた、それは在來の專
ら語學を教ゆるの學科を講習科と名づけ
専門の學科の方面は、百工化學といふも
のを起し、茲に舎密の學科が、新瀉に起
つた、是れ學校の一大變革であつて、此
百工化學を起す爲め、舊來上人を聘したが
其の人は美濃の出身で村橋次郎といふ人
であつた、此人は講習科が一通り終ると、東
京に去り、後、村橋次郎氏が來て、そ
の教頭といふ位に任じられたのである、講
習科の方面には、最初大塚某といふ人が來
たやうである、それと殆んど同時に、今
處名ある三宅米吉氏も講習科の教頭に來
てゐた事がある、斯様に學科を改めて以
來の事は、自分は殆んど知らぬ、自分は
明治八年に新瀉學校を辭して、上京した
譯であるから、その後の事は一切知らぬ
が、何れでも一年位後に學校は、遂に英
語學校と合併せられたかと思ふ。
新瀉學校の前後に關する自分の知る處

は此の如きに過ぎない、勿論幼少時代の
記憶でもあり、又在京者で此時分の事を
知つてゐる人も甚だ少ない譯であるから
實は甚だ覺付かない談話であるが、前通
の通り何うか自分の足らざる處や或は誤
れる處は、補ふて貰いたいものである、
補ふて貰いたいものである、
その他にも當分の事を記せらるゝ人は
越後に多しと思ふ、補遺を新瀉新聞
の舊夢談を一讀して、補遺を新瀉新聞
社に寄せらるゝは、唯だ舊夢の幸のみで
ない、懸於ける教育史の資料としては
最も貴重なものと思ふから、必らず高
校を併しませらるゝことを切望するであ
る(完)

此の如きに過ぎない、勿論幼少時代の
記憶でもあり、又在京者で此時分の事を
知つてゐる人も甚だ少ない譯であるから
實は甚だ覺付かない談話であるが、前通
の通り何うか自分の足らざる處や或は誤
れる處は、補ふて貰いたいものである、
補ふて貰いたいものである、
その他にも當分の事を記せらるゝ人は
越後に多しと思ふ、補遺を新瀉新聞
の舊夢談を一讀して、補遺を新瀉新聞
社に寄せらるゝは、唯だ舊夢の幸のみで
ない、懸於ける教育史の資料としては
最も貴重なものと思ふから、必らず高
校を併しませらるゝことを切望するであ
る(完)

序

大隈重信侯の傳記は種々出版されてゐるが、その中で最も正しく且つ浩瀚なのは侯の歿後三年餘を費し、隈門の同人に編纂された、大隈侯八十五年史三冊であつて、侯の事蹟は遺憾なく之れに悉されてゐるかにも見えるが、併し十分の望を云へば、多少の遺憾がないでもない。それも其筈である。侯の傳記ほど幅が廣く且つ長く、複雑で崎嶇の徑路に満ちてゐるものは無い。侯の事歴は維新史明治大正史のあらゆる重大事件に交渉があつて、何んとしても切り離すことが出来ない。侯は維新の際早く身を起して政治の要局に當り、當時至難とされた外交と財政を處理すると共に、終始進歩主義を持して百般の文化施設に努力された。此間の經歷は維新史明治史が復

序

雜であると同じく、侯の經歷も頗る複雑であるから、どんなに委しい傳を書いても、尙ほ書き足りない感みがある。且つ普通傳記の體は主人公に専らであるために、それには精しいが、主人公を繞る周圍に就ては、簡疎の筆を用ゆることが恒例となつてゐるので、何人の傳でも往々公平を缺くの非難が起る、必竟歴史と其體を異にするからであつて、一概に傳記を咎むるは酷である。

大隈侯は背後に薩長の如き強國をもつてゐる人でなく、そしてその擔任の事業は、外交と云へば財政と云へば、維新當時に於て何れも至難の業であつた。且つ當時守舊頑冥の人が朝廷に少からずあつた。幾んど或る時は滿朝皆敵であつたこともある。侯は之れと戦ひつゝ、難局を處したから、種々の誤解種々の讒構の起つたのも無理ならぬことである。侯はその活躍時代に

於ては晩年と異つて、寡黙の人であつたから、口舌で辨疏することなく、非難攻撃を一笑に附して自ら信ずる所に邁進した。それが爲め今日に至るも尙ほ毀譽の定まらないことがいくらかある。侯は絶対に自ら筆を把らない人であつたから、自家の心事を書いたものは一紙もない。侯は過去を語るを好まず、一切愚痴を云はず、自分を辯護する人でなかつたから、或る事柄に就ての疑義はいつ迄も疑義として残つて居る。侯は晩年に於てこそ自家の經歷を語られたが、それにも常に自家の辯疏を避けられた。随つて侯の一生の功業の真相を發揚するには、傳記以外に何物か無ればならぬ。此一書が乃ち其真相發揚の試みである。

本書の標題は其内容を如實に語つてゐる。即ち文獻に徴して侯の事蹟を考證したものが此書である。侯に關する文書は侯自身の家にも數多く残

序

三

つてゐる。それは今整理されて數百卷となつてゐるが、本書にこれから採つたのも少なくないが、侯と交渉のあつた諸家に存する書簡や日誌で侯に關するものか主として考證の材料に採られた。斯く文獻に徴して事實を考證することは、正しき行き方で、これでなければ正確を得ない、亦公平を得ない。兎角侯本人に諸家より寄せた書簡は幾分か文飾があると見ねばならぬ、筆に遠慮斟酌がありと見ねばならぬが、他人同士の往復にはそれがないから、斯る文獻こそ實相を語る最も大切のものであることは言ふまでもない。此等文獻の内には侯の敵手の手に成つたものもある、隨て侯を罵倒するものもあり、侯を讒誣するものもあり、亦侯を支持する側の文獻には、侯を賞賛し、侯に對する非難を辨駁したものもあつて、それ等を湊合して突き合はして見ると、初めて公平の斷定が下し得らるゝ。著者は出来る限り主

四

觀的議論を避けて、實證的文獻をして侯を語らしめてゐる。そこに此書の特色がある。

著者は帝大に史學を修めた人で、侯とは何等恩怨の關係が無い、現に帝室修史の局に奉仕して編修官であるので、諸家の文書を翻閱する便利がある。性來侯の事蹟研究に興味を持ち、官暇考證に力を注ぐこと數年の久しきに及び、侯の事蹟に就ては頗る造詣がある。此人により此書の成つたのは時を得たと思ふ。と云ふのはこれまでの侯の傳は、諸家の文獻を博搜してそれを材料とする便がなかつたので、疑義のあることはいつまでも正解を得ず、臆測が生んで、それがどの傳にも踏襲されてゐる。實は大隈家に存する文書でも侯の歿後初めて現はれたもので、他の元勳諸家の文書も久しく秘されて、其の世に現はれたのは極めて近いことである。故に従來侯の傳を

序

五

立るに實證的考證の出來なかつたのも已むを得ないことであつたが、今は幸ひに諸家の文獻の祕密が解かれて、諸家の傳記も追々刊行さるゝに至つた。乃ち實證的考證には誠に好都合の時である。著者が此の好機に乗じたのは、私が時を得たと云ふ所以である。

今より溯つて維新當時紛糾の時局を顧み、如何にして侯は外交の難局を處したか、如何にして亂麻の如き財務を理したか、岩倉一行が歐米派遣の留守中侯が如何に政務を料理したか、征韓論には侯が如何に進退したか、守舊派の大立物島津に對し侯は如何に對抗したか、民部大藏を兼ねた侯に大なる壓迫の起つた時侯は如何に進退したか、強國の背景を有たない侯は何に據つて其の地位を支持したか、薩長閥の代表大久保木戸と侯は如何なる關係であつたか、明治十四年政變の實情はどうであつたか、降つて條約改正の實

六

情はどうであつたか等々、よそ此等重要事件にまつばつて機微に属し真相の今日まで闡明を待たないものが種々あつて、それが常に薄暗かりであるため、侯に對する誤解疑誼は謎の如く残つたのも諸家の文獻に就て見ると、宛から明瞭で照すが如く瞭然を得るに至つたのは、實證的考查の結果であると言はねばならぬ。

本書は大體大事件中心で侯を考證したのと、人物中心で先輩や同僚と侯の關係を考證したのと二篇から成つてゐる。大事件と大人物とはおよそ網羅されてゐるが著者に腹稿があつて、枚數の制限と印刷期日の切迫で割愛を由義なくされたものの少なくないのは甚だ遺憾である。要するに、本書は恰も「大隈侯八十五年史」の事實を一言明確に裏書したのである。同史の附録として讀むべきものである。

新潟學校時代の舊夢談

市島謙吉

はしがき

明治五六年頃同じく新潟の學校に机を共にして初めて西洋の學問をした頃の同窓は今極めて少ない。兎もするとその同窓が會して語り合つて見ると、面白くもあつて、今から考へれば殆んど隔世の感がある。自分は其頃十三四歳の少年であり、且つ在學の間が僅かに二、三年位の短期に過ぎなかつた爲めに、覚えてゐることも甚だ少なく、且つ少年の觀察であるから、その觀察も誠に覺えない。幸ひにして當時同學の先輩が二、三人在京であつた頃、（い）と前後の事を聞き糺したりなどしてみると、いろいろの事が分つて來て、一通り其當時の事が話せるやうに思ふ。併しながら越後の最近の文明といふものは、此幼稚な學校が紀元をなしてゐるのである。其點より考ふれば、越後の文明史を他日編まんとするには、どうしても其時代の教育の有様を缺いてはならぬ。然るに此時代のこととは、多く忘れられて今は語る人なく、若し二三十年を経過したならば、遂に其時代の事實は全く湮滅に歸して、此文明紀元の材料が越後の歴史なり若くは教育の歴史なりに、全く缺ける虞があるであらうと思ふので自分は不東ながら蕪雜な談話ではあるが、取調べただけの事を書き現はして、教育史などを書く人の他日の參考

に供したいと思ふ。返す／＼も思ひ出づる儘を粗略に語るに過ぎないのだから、當時同學の人、若くはその頃學校に關係した人の眼に此の記事が觸れたなら、自分と志を同じふする人は、願くは材料を供給して、自分の足らざる處、誤れる處を補正して貰ひたい。

一、新潟に於ける英學の端緒

新潟が幕府の末路に開港場となつて、五港の一に數へられた結果、早くも維新以前新潟には、特に外國人に接する係員が置かれた。それは農學界の先輩として知られた津田仙氏の如き、その頃は外國係として、新潟に来てゐたこともある。新潟は五港の一に數へられたが、實はあまり開港場たる用を爲さなかつた。併し五港の一たる格として、外國人に對する設備を要したのである。此津田氏が新潟在住の頃、早く英學の端緒を開いて、津田氏を師として、五、六の人々は英學の研究を始めた。

斯様な譯だから大政維新となつては、無論英學の機運は、此處に發せざるを得なかつた、自分の知つてゐる處に依れば、平松時厚といふ人が、知事に任せられたのは明治三年六月十九日であると思ふが、此頃よりして、英學が先づ知事の考へを以て計畫せられた様に思ふ。

知事の事をいふに就て序でながら府縣の沿革を言はんに、今の新潟縣には、自分の郷里北蒲原郡の水原に越後府が置かれ(明治元年六月)同年九月新潟府となり、更に二年二月に再び越後府が置かれ、更に同年二月二十二日に新潟縣が置かれ、更に同年七月二十七日に水原縣が置かれたといふ様に、いろ／＼沿革もあるが、明治三年六月十九日に今の新潟縣が置かれて、その時の知事に任せられた人が平松時厚

氏で、氏は元宮内省の権大丞であつた。

平松氏の考へを以て初めてブラウンといふ人を新潟へ聘した。是が新潟に英學の起る紀元とも謂ふべきものであらう。此ブラウンは其時分流布した英文典の著者で、所謂ブラウンの文典といふものは、その當時盛んに用ひられ、その爲めにブラウンといふ名を、人が知つてゐる様なものであつた。斯人は一人の娘を伴ひ來つて、その娘もいくらか英語教授の手傳をした。

二、楠本縣令の激勵

此時分の學校の組織は如何なるものであつたか詳しく分らんが、何にしてもその時分の學校といふものは都にこそ相當のものがあつたが、地方には唯だ各所に家塾がいくつあつた位なことで、所謂寺小屋跋扈の時代であつたから、此新たに起つた學校といふものも、先づ家塾の少しく纏つた位のものとして可からう。無論何々學校といふ様な立派な名稱もなかつた。何處で英學を教へたか、その場所も自分は知らない位である。無論維新の當時に於ては英學を主にした譯でもなく、之に伴ふて漢學並に皇學などの學科も並立せられた譯である。是等は皆場所を異にして、殆んど同時に三學校が開かれたといふ有様である。

漢學の方には何んな人が教師であつたか分らぬが、皇學の方は樋加茂の小池内廣がその教頭らしい位置にゐた様である。英學の方ではブラウンの外に、當時新潟縣の一等譯官で、中石得高といふ人が助教授といふ様な格で、譯讀などは此人が受持つた様に聞いてゐる。

その時分學生の數はどの位あつたか、之も詳しくは分らんが、何しても兵亂の揚句で人心も定まらぬ時代であるから、學校が開けたといふても誰も來り學ぶ者はない。殊に新潟は商人の多い所であるので、學問などに志す者は少なく、土地の者で入學したものは幾何もなかつた。そこで知事は據らなく縣廳の役人の子弟などを勧誘し、是等の學科を修めしめた。だから、その數は二、三十人位に過ぎなかつた。此ブラウンの新潟にゐた間は二、三年位でもあつたらうか、實は折角外國人まで聘しながら、唯だ僅かに英學の萌芽を發したといふ位の事で、此人は去つてしまつた。が併し新潟の英學は、此時より始まつたといふてよろしい。

平松に代つて縣令となつた楠本正隆は誰も知つてゐる他日の衆議院議長で、大村藩士である。楠本は外務大亟より轉じて明治五年に新潟へ縣令となつて來たので、新潟縣の改革は全く斯の人の赴任後であるといふてよろしい。楠本は晩年は頗る不得要領の人と評せられたが、此時分は年も若く、仲々元氣壯んな時代で、赴任勿々あらゆる方面に大革新を試みた。例へば、斷髮令は出ても誰も結髮であつたのを髮を切らせると共に、不馴な帽子を戴かせるといふ様な勢いで、僅かの間に社會の各方面に激烈な變化を與へた。勿論英學の如きは此人に依りて、非常な革新が圖られた。

是までは學校の組織も碌に纏つてゐなかつたものを、楠本に至りて大に規模を擴張して、初めて學校らしいものとなつた。その頃の學校の組織は主として慶應義塾に則つたと思はる。校名は英學校と呼び、學長には二橋元長を挙げ、外人にはキングを聘し、教頭とも言ふべき位置には、縣廳の一等書記官であつた土取忠良といふ人を用ゐた。序でにいふが、その時分には新潟の如き開港場には、外國人と交渉

がある所から、官制に於て譯官といふものを置いた。それが一等より數等あつて、無論英學に通じた相當の人が來た譯である。斯様な人は置かれたが縣廳には格別仕事がないので、いつもこれを學校の教授に充てた。乃で前述の如く平松時代には、學校はあつても僅かに二、三十名の生徒であつたのに顧みて、楠本は猛然起つて管内の巡回を試み、盛んに就學の奨励をした。管内至る所大地主を集め時勢を論じて新學を學ぶの必要を説いた。楠本縣令は大地主に向つて『お前等は子供を生んでも、之を教育すること知らん、そんな事では禽獸と選ぶ所がない。』といふ様な激語を發して盛んに勧誘した。

その當時は未だ官尊民卑の習風の残つてゐた頃であるから、縣令様御自身の御巡回御勧誘といふので、富豪の輩は恐縮して子弟を出すことを諾した。斯くいふ自分もその時の勧誘で、新潟へ出ることになつたのである。又その時の勧誘に依つて斷髮せしめられた。自分は斷髮の勵行だけは喜んで受けた。此頃油をつけてすき櫛にすかれて、結髮することは日々の一大苦惱であつた。それを免る譯であるから喜んで應じたけれども、英學を學ぶため新潟へ赴くことは躊躇した。と云ふのはその頃自分は漢學塾にあつて聊か漢學の趣味を感じた頃であつた。今日と違ひその時分の少年は、十二、三歳位でも無點の漢文を読み、或は詩を作り、漢文を作るといふ位な程度であつたから、今日より見れば非常に進んだものである。自分は漸くにして漢學趣味を感じ、これから相當の力の付くことが、眼に見えてゐる時であるのに、時勢の必要とは言へ、茲で廢めてしまふことは生涯の損と考へて、餘り氣も進まなかつたが、何しても縣令は目星を打つて出せといふし、親も強いて勧めるので實は本意ながら新潟へ赴いた様な譯である。

三、楠本縣令の雄斷と學校の隆盛

以上は當時の自分一個の所懐であるが、却説縣令は新潟縣の極端たる岩船の村上まで赴いて、その時に一、二人の村上に得た。それは今故人となつた、工學博士近藤虎五郎氏の父近藤金彌といふ人並に竹内政武の兩人である。此二人は共に村上藩の士族であつたが、縣令は此二人を選抜して學校の事務掛にと新潟へ伴ひ來つた。慥か近藤氏が前で、續いて竹内氏が來た様である。

此二人の役目は、何といふたか忘れたが、今いふ幹事といふ様な役目で、之が久しく學校の事務に従事した。斯様な事で、一巡知事は勸誘を試みて、幾何か學生も來たが、併し未だ數が少かつた。乃て知事は斯んな事では、充分な教育は出來兼ねると更に一大雄斷を試みた。それは私費で學生をとるといふ事では、唯だ富豪の子弟の來り學ぶ外、殆んど學生を得ることは出來ないから、學資なくして篤學のものを得るには、別な方法に據らねばならぬといふことよりして、その當時新潟縣の行政區劃が二十數大區に分れてゐたが、各區に命令を傳へて、必ず區費を以て、若干の學生を是非新潟へ出せといふ訓令を出した。是に於て各區とも若干の學生を選抜して、新潟へ送ることとなり、此強制手段で、初めて相當の學生數を得ることとなつた。嘗て早稻田中學の教頭をした今井鐵太郎氏の如きは其一人である。斯様なことで結局隆盛の時代には、學生の數は四五百人位に達した。

是より先きブラウン已に去り、更に教師を得る必要が起つたので、その時に聘せられた人は首藤隆三氏である。氏は早稻田大隈邸に早く英學を開講した尺振八門下の人で、國民黨代議士として、長く仙臺

より擧げられた人である。その首藤氏は當時は仲々立派な好男子で、能く黃八丈の羽織を着て學校へ出席するのを、吾々は子供心に記憶してゐる。此人に就ての奇談は、初め新潟へ着すと秋田屋といふ旅館へ泊つた。乃で縣廳から召狀の來たのを見ると、何日何時袴で出頭せよといふ事であつた。勿論英學者の事であるから袴の備などない、乃で據なく宿屋の主人に計ると、幸に義太夫語が來てゐるから、取敢ず其袴を借りて上げようといふと、先生無造作に、それで可いといふので、出頭の時刻は迫るし、之を着けることになつた。是は天鷲絨で造つて、金糸で大きな紋の附いてゐる、所謂藝人の袴である。それを無造作に着けて、出頭したので一笑を博した滑稽もある。も一つ記憶されてゐる話は、先生の學校に臨んだ時、第一の講義は、その時分頗る新しい普佛戦争の事を萬國史から抜いて講じた。然るに先生は仙臺辯であるので、ナマリが餘り甚しく、流石に熱心な講義も誰一人分らなかつたさうである。

扱て又新たに開かれた學校の位地は最初は奉行所の官舎で、今現在警察署のある邊りかと思ふが、之が南二番といふ官舎であつた。それが間もなく狹隘を告げて、南八番といふ官舎へ移轉した。それは今の農工銀行の建つてゐる邊りである。此南八番も追々狭くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所のあたりである。何しても學校のために特に設けた場所でないから、間取りなどもおかしいものであつた。勿論疊を敷いた上に、テーブルや腰かけを置くといふ譯であつた。又そこに集つた學生も初めの頃は佩刀をして來るものもあるといふ様な譯で、年輩なども極めて不中で、老いたるあり、子供もあるといふ様な不揃いのものであつた、遠方から來てゐる學生も少なからずあつたから、寄宿舎の設備もあつた。それ等の事は後に詳しく言ふ折もあるが、兎に角普通の日本座敷に、室の大小に従つて、

五人、十人雜居した。

四、變則よりも正則

首藤時代の教育方針は謂はゞ變則流であつて、譯讀が主であつた。唯だ書物さへ理解すればよいといふ風で、正則に音を正すといふことは二の次であつた。勿論首藤は教頭の地位であるから、多数の學生を此人が教へた譯でなく、多数の學生を教へる教師を寧ろ教へたのである。その一般學生を教へる教師は、學生の優等生から擧げて句讀師といふものを作つた。

句讀師といふものは、漢學塾の流れを汲んだ名前であるので、今日の人は一寸と妙に思ふ名前であるが、一時斯様な名前が付いてゐたものが十人位あつたと思ふ。此句讀師が、首藤先生の教へを受けて、一般の學生には句讀師が教へるといふ譯である。而して句讀師は何を教へたかといふに、當時は極めて程度の低いものであつて、グードリッチ氏の英國史などが最も六ヶ敷しいもの、うちであつた。無論此上級の學生といふものは、新潟の學校で育つたといふよりも、寧ろ外で相當の程度まで學んで、然る後新潟學校へ來た連中である。首藤が新潟學校へ留つたのは、二年許りであつたらうか、確か其後外國教師を聘した様に思ふ。而してそれは英國人のキングといふ人であつた。

此の素性は能く分らぬが、如何にも人格の低い人で、又教へ方も餘り上手でなく、隨つて怒りつぽく學生を叱りつけたりなどした所から、甚だ生徒の人望なく、久しく留る事が出来なかつた。此人に就て語るべき一珍事がある。或夜刺客がキングの家を襲ふたといふので、大騒ぎになつたことがある。だ

ん／＼調べて見ると、抜刀でキングの寢室へ行つて、布団の上から切りつけたといふキング自身の話で、成程着てゐる布団には、刀で切り付けた跡が存してゐる。乃で大騒ぎとなつて、縣廳でも外人を刺殺するなどといふ事は、大變の事で、それが爲めに、兎もすると巨大な償金をとらるゝ事もあつた譯であるから、一時犯人を大に搜索した。誠に今から考へて見ると馬鹿々々しいと思ふのは、犯人搜索のため新潟全市の市民に二、三日間禁足を命じたことである。此調べのつかぬ間は一步も外へ足を踏み出すことが出来ぬといふ事には、今は一笑を催す様のことであるが、之が爲め市民は迷惑を感じた。乃で犯人は出ぬ、何んでもその時の評判では、キングが償金を食ふため、自分で芝居をしたらうといふので、遂には償金を出さず、有耶無耶の間に濟み、間もなくキングを解備して、事は落着した。

キングに次いで聘せられた外人は、米人のエドワード・セームス・モスといふ人であつた。之が長く新潟に居り、此人の來た時代には、學校は最も繁榮を極めた。此モスといふ人は、横濱の新聞記者をした人で、學力は格別なかつたかも知れぬが、教へ方は上手な人であつた。此モスが學校に聘せられて以來、學校も初めて正則の面目を保つて來た。

モスの新潟へ聘せられた時分、新潟縣廳へ一等書記官として來たのは、梅浦精一といふ人で、學校へ教鞭を執ることになつたが、無論教頭とも言ふべき位置で、最高級の學生は皆此人に教へられたのである。その後亦同じく縣廳の六等譯官を勤めた高野爲隆といふ人も來て、教授を助けた。併し之は餘程後の事である。

モスの新潟へ來たのは、慥か明治六年の頃であつたと思ふ。その譯は此頃丁度金星が太陽を横斷して

日蝕を生じた時であることを記憶するが、モスが初めて日蝕を見るには、ガラスに鍋墨を塗つて見れば、あり／＼と見えるといふことを教へて皆々競ふて日蝕を見た事がある。今日では誰でもその位の事は知つてゐるが、當時は甚だ珍しく感じたのである。丁度此時分學校に充てられた町會所が市中の火事の類焼に罹つた爲め、假に何れかへ移轉することになつて、暫時廣小路上の勝樂寺へ移つた。此移つてゐた間が半年位のものであつたらうが、もう學校も大分大きくなつて來た譯で、茲に初めて學校新築の議が起つて、白山浦に元米廩の多く列んでゐる處を選び、その米廩を潰して茲に初めて新築をやつた。その落成までは此勝樂寺にゐたのである。

五、本校の建築と分校の設置其他

今その勝樂寺時代の事を一つ二つ話して見ると、先づ本堂が寄宿生の讀書室でもあり、寢室でもあると云ふ鹽梅で、薄暗い廣い處に、四、五十の學生が机を列ねてゐたものである。乃て夜具の置場は、本堂の一段高い所、即ち佛壇の下に、日中は果々として積まれてゐるといふ有様で、その本堂と背中合せに屏風を立て廻して、そこに幹事室や事務室が置かれて、他の各室が講堂に充てられ、庫裡が食堂に充てられ、賄所は本堂の昇口の片側に假にバラック様のものを作つて、其處で炊事をやつた。宛で戦にも行つたやうな鹽梅で、頗る雜踏を極めた。併し斯様な雜踏の間にも、教授は常の如く進行してゐた。斯様にしてゐるうちに、白山浦の新築も出來上つたので、茲へ移つたが、此の學校が出來てから初めて新潟學校といふ名稱を付けたのである。

今までは町會所や或は奉行の官舎などを學校に應用した譯であるのに、此度は特に手廣の建築をした譯であるから、茲に初めて堂々たる學校の面目を現はして前に比ぶれば實に月露の差を生じた。此時分に學校の徽章も定まり、旗にも學生の帽子にも鷲を交したものが付いた。その時分の知事は楠本正隆で、學長は二橋元長、その下に校監といふものが置かれ、それが橋口正弘といふ人で、此人は楠本と同藩で矢張り大村藩の人であつた。幹事としては前にいふた近藤、竹内などが事務を執つたのである。そこで教頭には梅浦精一といふ人があり、他の教師としては、此時分縣官の出身地の關係より、大村藩から數多來てゐた。又松平正直といふ人が、福井の人で、縣廳の樞要の地位にゐた關係から、福井の人が澤山教員に來てゐた。其他會津の人で來てゐた教員もあるが、それ等の名は後でいふ折もあるであらうが、兎に角學校は、その時分無比の繁榮を來たし、學生の數が四五百にも達した。

是に於て新潟縣の二、三個所に分校を起すの議があつて、場所は新發田、長岡、柏崎に定められ、新潟に來り學ぶ能はざるものは、皆此分校に學ぶこととなつた。

分校の事に就ては、詳しく知らぬが、併し幾何かの事は、後にいふ事にして、新潟學校(本校)のその頃の教へ方などに就て、少しく御話するが、いふまでもなく、此時分の教育の組織といふものは、丁度中學程度といふ形のものであつて、無論専門の學科を主とするものでなかつた。中學程度といふのであるから、専ら英語を主として傍ら洋算に力を込めたものである。

その組織は今日の我邦の中學校とは違つて、何れかと言へば、西洋の中學校をその儘日本へ持つて來たといふ風であつた。モスの時代となつては、盛んに正則の獎勵をしたので、斯人の教へ方は、極めて

實際的であつて、日用の事柄を主に立て、書物を讀むに音を正すといふ事は勿論、綴字などには非常に重きを置いて、書取りの時間が多くあつた。又地理などを教へるのにも、餘程實際的で、書物に就て學ばせる外に、講堂の壁に懸けてある世界地圖に就て、學生をそのまわりに集めて、一週何時間といふものは、必ず學生に地名を指點する様に努めた。

モスといふ人は、書が仲々巧みであつて、筆跡が極めて美事であつた。随つて習字にも重きを置いた。習字に附帶して、或上級には必ず手紙を練習させた。手紙は主に商用の手紙であつて、その獎勵の結果としては、仲々今日の中學よりも遙かによく歐文の手紙を書く事になつた。此人の教へぶりをいふと、書取りなどの外は、總て自分のまわりに學生を立たせて置いて、綴字なり或は地圖の地名などを指點せしむるのであつた。その方法は立たせて、名を呼んで順番に問ふのであるが、先づ第一番にをるものよりかけて、それが答へないと順番に次へ々と及び、答へたものが直ぐに「モ(上へ上れ)」といふて、答へることの出来なかつたものゝ上へ進むのである。斯様の方法で問はれるのであるから、學生は皆勵むものである。而して一時間の終りにその日の席順が定まる譯で、教師はそれを出席簿に控へ、それが學期終りの點數になるのである。

六、教師に關するいろいろ

以上は主に正則の方面の事であるが、前述の教師の位置にある梅浦といふ人は、専ら上級の學生並に教師以下の教師を二、三の組に分つて、譯讀を授けた。それは論講の方法で教へたのである。その時分

どんなものを論講の書物としたかといふと、今では廢つたが、ウェランドの倫理書、經濟書などが、その時分流行で、是等が最高級の本であつた。尚ほその外にギゾーの文明史、ミルの經濟書、クワッケンボスの究理書などもあつた。梅浦教師は論講の外に、自ら文章を書いて(時文)それを英文に譯させる事などもやり、或は又外國の新聞の或部分を分割して、之を各々に翻譯させるといふ事を努めた。而してその各々から出した翻譯を纏めて、書き直す人がその級にあつた。それは後に實業界に入った萩原源太郎氏が書を能く書き、又達者に書くといふ處から、此人が清書を擔當した。

生徒の譯文を梅浦教師が筆を入れた、扱て又それが纏つて何うなるかといふと、當時の新聞は小型の未だ幼稚の域にあつたが、之に寄稿することが、例であつた。それが爲めに自分などの譯したものが、月に二度や三度新聞に現はるといふ譯で、ひどく獎勵になつた様に思ふ。今日に於ては、新聞に文章を載せるといふ事は、誰でもやる事で、餘り名譽とも思はない事であるが、その時分は自分の筆になつたものが、新聞に載るといふことは、學生として大いに面目に思つたものである。随つてそれに載せるといふ事が獎勵にもなり、又新聞社の爲めにもなつたものである。又梅浦教師の書いた文章を英文に翻譯するのは、餘程上級者中の少數者のやつた事である。今でも覚えてゐるが、或時の文章は「民選議院設置の議」といふ長文が、課題に出た事を記憶してゐる。

で、その時分の月謝、寄宿舎費は、幾何であつたかといふに、是も多少の變遷はあつたかも知れぬが、今記憶してゐるのは、何でも南八番時代の月謝が金一朱即十二錢五厘であつて、寄宿舎費は二圓五十錢であつたやうに思ふ。十二錢五厘など、言へば、大層安いやうだが、實は今日の五倍と見れば矢張

り相當のものであつたに違いない。乃で町會所、南八番時代には前述の句讀師といふものが置かれて、幾何かの俸給を受けたものである。例へば十圓位の俸給を受くべきものが、自分が教はるといふ方から、三圓許りを引いて七圓位の俸給を受けて居るといふ様なものであつた。何でも新潟學校となる以前の教頭以下の句讀師などは、俸給の最も高いもので、十圓位のものに過ぎなかつた様である。新潟學校と改るに及んで、句讀師の名も廢せられて、何といふ名が付いてゐたか忘れたが、謂はゞ今日の教員といふ様な名義で、諸方から多くの人達が聘せられて、十數人の教員が備はつた。是等は矢張り二、三の取除けの外は、皆教頭に就て一面には教へを受けた。その取除けといふのは、例へば數學の教師の如きは、唯自分は教師を務めるといふだけで、教へを受けなかつたのである。

教師には何んな人が来たかといふに、前にも言つた通り、知事が大村藩であるといふ關係から、大村から土屋廣次といふ人が来てゐた。それからその時分の縣の知事の次の人で、松平正直といふ人が来てゐた關係から、その人は福井であるところから、松平正秀、松平誠、津田東、松原某などいふ人も来てゐた。それから會津の人で、萩一雄、それから福井から武藤鳳六、それから之も確か福井の人であつたと思ふが、數學の教師が高橋貫一、それから長岡からは、佐野洪藏などいふ人が来てゐた。遡つて新潟學校となる以前の所謂句讀師といふものは、何んな人であつたかといふに、中川忠太郎、石澤兵吾、長谷川寛治等の人々であつて、是等の中には、新潟學校となつても、尙ほ繼續して所謂助教といふ様な格で教務に與つた人もある。

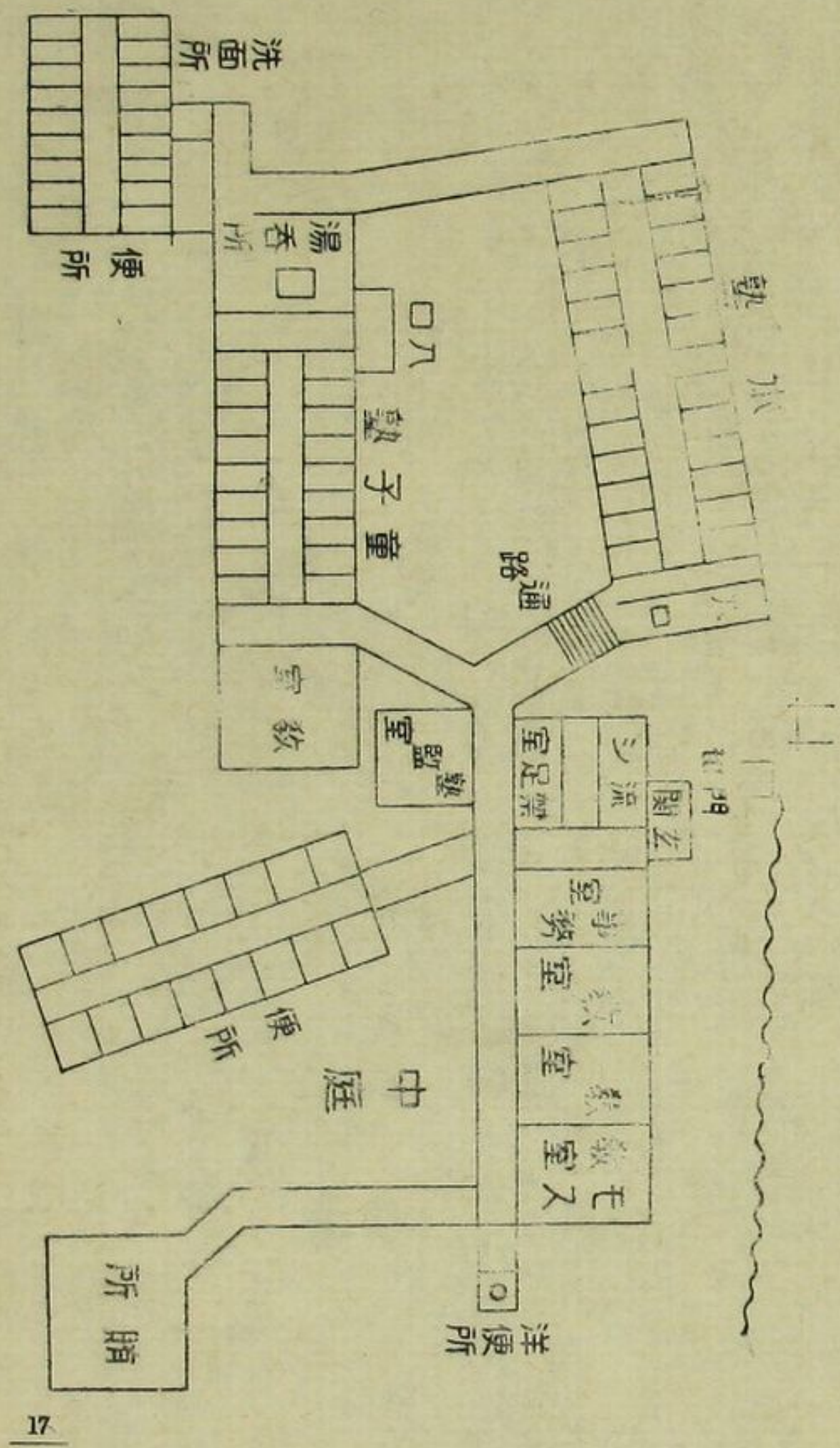
七、久保氏の談話

それから分校では新發田に久保扶桑氏、長岡柏崎に小島銑三郎、藤井三郎、此人々が教頭になつて來たのであるが、此二人の中熟れが柏崎であり、熟れが長岡であるといふ事は、一寸自分には覺えがない。兎に角是等の人々が聘せられて來たのである。

乃で長岡から出た上級生として知られてゐるのは、故人となつた波多野傳三郎氏、盲啞學校長であつた小西信八氏などである。

久保氏が新發田へ來て教頭になつた頃の事に就て、いつぞや久保氏に面會した折に直接聞いて見ると、久保氏は次の如き興味ある話をした。自分は實は東京に於て北海道へ出懸けて、何か一つ事業をやりたいと云ふ考へで、自分の後の事は皆岡山兼吉氏に托して、僅か許りの旅費を以て、海道を志して東京を發した。その時分北海道へ行くには、越後を経て行く方が近道であつたので、先づ越後を志して東京を發すると、前橋に着き圖らず病氣に罹つて、多くも無い旅費が、殆んど盡くるに垂んとして病氣が癒つて、やつとの事に新潟へ着いた時は、囊中僅かに金一朱を餘すのみであつた。その時分新潟の師範學校に平井と云ふ友人があつて、それを便つて相談をしようと訪ねて見ると、生憎その日は不在であつた、據らなく何處かに旅宿を求めて、懐にある全部の金を茶代として、抛り出してしまつた。處で全く無一物となつてしまつたが、幸ひに翌日平井に會つて見ると、平井の云ふには、北海道へ行くなら敢て止める譯ではないが、兎も角出懸けるに就ては、少しは金を持つて行かねばなるまいから、先づ基礎を

作る爲め、暫く越後に足を止めては何うかといふ。そしてその積りなら、新潟學校へ世話をするといふので、自分も已むを得ず、その氣になつて梅浦の世話で、新發田の分校の教頭になる事となつた。その時分自分は役人といふ資格でなく、所謂御用掛りといふ役で、縣廳との條約の如きは宛かも外國人を備ふ場合と同じ様な約束のとりかわせをして、そこで新發田分校の教務に與つた。新發田には二年許りも足を止めたであらうと思ふ。さうすると楠本が東京へ去つて、その後には永山盛輝といふ人が知事になつて來てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭して見ると、永山は脇差などを脇挟んで奉書に書いた辭令書を芝居などにある様に、雙手に高く捧げて、恭々しく自分に渡したのを即座に開いて見ると、是は自分を役人扱ひにする事に改めてイクラか俸給を増して、柏崎の分校へ轉任せしむる辭令であつた。全體自分は役人になるつもりではないので、初めもそれが爲め外人と同じ様な條約をとりかわした譯であるのに、豫め相談もなく、突然役人扱にする事に對して癪に障つたから、辭令書を見ると直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言ひ出したら、わきに座してゐた田沼がまあ／＼兎に角御受けなさいと言つて、頗りに宥めた。併し自分はその時から厭になつて遂に辭することに決心した。新發田を辭するに當つて、その時分自分が世話した學生の中に自分の宗家の子弟(佐藤伊左衛門、須貝四平)や白勢家の子弟(白勢和一郎)もあつて、此兩富豪が私に向つて、何うか私共で貴方を世話するから長く越後に止つて貰ひたいといふ勸告もあり、自分も一時はその氣になつたが、東京の友人達が歸京を勧めるので、遂に引上げる事になつた。斯様な話で、幾何かその當時の模様も察せられる。



八、當時同窓の人々

當時の新潟學校の構造に就ては、何れ新潟縣廳にその圖は残つてゐやうが、今は他にその圖を求めても、絶対に之を得る事が出来ぬ。併し話の序でに大體何んな風なものであつたかを粗雑ながら茲に現はして見たいと思ふ。舊い事であるから、とても正確に現はす事などは、思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ前頁の圖の如きものであつた。

即ち中央に大きな入口があつて、一方は講堂、一方は寄宿舎といふ大體の構造で、講堂の有様は今の小學校の講堂と趣きは變つてゐない。寄宿舎は廊下を中央にとつて、兩側に三人乃至五人を容るゝ位な室が凡そ五十位もあつたであらうが、丁度今の病院の病室の如き趣があつた。此寄宿舎に學生の寢泊りしてゐた事は勿論、遠方から來てゐる教員も、亦寄宿舎にゐたものであつて、その人達は房長といふ様な有様で、他の寄宿生を監督してゐた。自分兄弟は未だ南八番頃には、新潟の醫界に名聲ある長谷川寛二氏の室にをり、それから會津の人の萩一雄氏の室にも居り、新潟學校時代には曾て刈羽の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室にゐた事もあるが、是等の人は年配も學問も先輩であり、單に房長として監督したといふのみでなく、頗る親切に學問其他の事に就て指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

新潟學校時代に如何なる人が、就學せるかを考へるも今に於て興味ある事であるが、唯遺憾な事は、その時分の名簿が殆んどなくなつてゐる爲めに、記憶してゐる人々の名が甚だ少ない。唯思出づる

儘に、人々の名を擧げて見ると、理學博士藤澤利喜太郎氏なども學校の創始時代にゐたのであるが、是はずつと舊いので自分はその頃の事は知らない。自分の競争者として、今猶記憶してゐるのは、宮内省の侍醫たりし桂秀馬、それから横場の筆工の子である古田鎮三、此兩人は極めて秀才であつて、常に自分と首席を争ふた人々である。それから大竹貫一氏、高橋邦三氏、小林善四郎氏、内藤久寛氏、廣瀬吉彌氏は等の人々も矢張りその時代に居た。新潟市の實業家中には、鍵富徳次郎、栗林貞吉、荒川才二、小山長作是等の人々も矢張り同時にゐたのであるが、勿論級は皆それ／＼異つてゐた。未だ幾人が記憶してゐるが、どうも今となつては、姓を覚えてゐても名を忘れたり、名を覚えてゐても姓を忘れたりして、茲に申述べることは甚だ困難である。曾て東京にその時分の同窓會を催したことがあつた。それは已に十數年前の既往になつたが、偶々今の内務省技師の近藤虎五郎君の嚴父、金彌老人（當時の幹事）の出家せられたのを機として、今の楠本男爵梅浦精一氏などを招いて、二十人許りの人々が會合したことがあつた。何にしても三十年振り、殆んど始めて出逢ふ様な譯であるから、昔は互に知り合つてゐる面々も、互に出逢つてみると、殆んど互に相知らぬといふ有様であつて、自分は比較的此等の人々と度々會つてゐる様な事から、紹介者となつて、是は誰、是は誰といつて紹介して見ても、その引合せられた人々は、殆んど呆然として暫く顔を諦視して、漸くにして理解が付き、成程それに違ひないといふ有様で、甚だ奇觀を呈した。何うも此時分の人達は多く集合するといふ事は、今日に於ては甚だ困難である。その集會の席にいろ／＼な懷舊談が出て、甚だ興味を感じたが、考へて見ると、随分舊いことであつて、近藤博士などは、吾々よりも遙かに年配若く、その時分は未だ每晚寄宿舎に嚴父の近藤老人に

抱かれて寝てゐた小兒であつたなど云ふ舊夢談も起つて、皆一度は近藤老人に叱られた面々であるから、それ等の失敗談を口々に語り出で、打興じた事がある。

九、その後の新潟學校

明治八年に至つて楠本縣令は東京府知事に轉じ、梅浦教頭は内務省の勸業寮に轉じた。唯だ外國人モスは九年頃まで止つてゐた様である。梅浦の去つた後は、會津人で阪井正義といふ人が來たが、此人は學殖足らざる爲め、間もなく排斥せられて去り、それに代り縣廳に一等譯官となつて來て、學校の教頭を兼ねた人は工藤助作といふ人で、之は確か弘前の人であつた。無論永山知事の時代である。之より先き確か明治六年と思ふが、全國に文部省が英語學校を起すといふ事となつて、全國を六大學區に分ち、六ヶ所に英語學校を置かれたが、新潟にも亦置かれた。是に於て二つの學校が並立する事となつて、新潟學校からも幾何かの學生が英語學校の方へ轉じた。併し新潟學校は依然として成立してゐたのである。唯だ新潟學校が追々年を経るに従つて、多少の變化を生じた譯は、當時遊學してゐた連中の中に、子供計りでなく大分年配の進んでゐた人々も多かつたので、學問の方針に關して一時議論が沸騰した。その要領は如何といふに、唯だ西洋の語學許り研究してゐるのでは、身を立てるの方法としては不完全である。何等か職業を得る學問をするに非ざれば、將來活路を得るに困難であるから、宜しく學校に一、二の専門の學科を置くべしと斯様な議論が一方に起り、之に對して専門の學科は、各々志す處に依つて東京に至りて學ぶべし、此學校は専門の學科を修むる階梯にして置けば可なりといふ二種の議論があつて、

互に闘つた結果、學校でも考へ、結局兩方の議論を折衷して、茲に二つの學科を分けて置く事になつた。それは在來の専ら語學を教へるの學科を講習科と名づけ、専門の學科の方面は、百工化學といふものを起した。これが學校の一大變革であつて、此百工化學を起す爲め、經營上人を聘したが、其人は美濃の出身で村橋次郎といふ人であつた。此人は經營が一通り終ると東京に去り、後ち中川謙次郎氏が來て、その教頭といふ位置にゐた様である。講習科の方面には、最初大石某といふ人が來たやうである。それと殆んど同時に、故人文學博士三宅米吉氏も講習科の教員に來てゐた事がある。斯様な學科を改めて以來の事は、自分は殆んど知らぬ。自分は明治八年に新潟學校を辭して上京した譯であるから、その後の事は一切知らんが、何んでも一年位後に學校は、遂に英語學校と合併せられたかと思ふ。新潟學校の前後に關する自分の知る處は、此の如きに過ぎない。勿論幼少時代の記憶でもあり、又在京者で此時分の事を知つてゐる人も甚だ少ない譯であるから、實は甚だ覺束ない談話であるが、前述の通り何うか自分の足らざる處や或は誤れる所は充分補つて貰ひたいものである。(元)

六尺五寸五分、最下部平版ハ七尺八寸ハ五尺八寸の長
方形、台石ハ四尺八寸ハ二尺ハ長方形、其高さハ五
分、碑石の中ハ四尺厚サハ二寸五分ハ高さハ五尺二寸ハ
全体の重量ハ約千五百キログラム、基礎工事は、
地下三尺ハ掘下け、割栗地形とし、厚サハ二尺二
寸のコンクリートをおち、こんど二寸二分丸のポルトセ
メントを埋め、ポルトセメントは台石を貫き、碑石と連して長
す。

碑面の文章ハ杉平康四早稲田大寺教授の撰じ、
書ハ唐の裴休の書ハ圭峰定慧禪師の傳法碑の法
帖ハ集字を以て、其を擴大し、句勒し、帖ハ無一字ハ
裴休の字の筆畫を湊合して作りし。此集字

を以て、**楠瀬惇氏**が篆額也此の人の揮毫也

以上建碑ニカを致せん人々
建碑の計畫を始めし、約半歳、且つ終始監督せん

一ハ相山均一式に對し、爰に神禮を申す

今爰に此碑を大隈侯閣下に獻呈せしむ、願くハ

四民敬慕の微衷を諒とせん、長く受護せんと

と杜英ひます

新編 幼時時代の學校の思ひ出
市島謙吉

幼年時代の學校の思ひ出 (その五)

惜しい漢學から英學へ——新潟學校時代

市島謙吉

私の幼時受けた教育に就て語るとなると、六十餘年の昔に溯のぼらねばならぬのです、私の故郷は越後ですが、私の幼時には郷國に限らず、どこにもまた小學校が無かつた。當時は寺小屋時代で、低級の教育は寺小屋でやつた。寺小屋は其の名の如く、寺社で重に兒童を集めて読み書きを教へた。教科書と云うても庭訓往来や商賣往来などでしたが、これが調法に出来てゐて、習字の手本にもなり、日用諸物の名詞も字も教へることが出来る讀本であつた。尙ほ此外に古狀揃なども用ひた、これは手紙體に書かれたものですから、手本ともなる外に手紙を書き習はせる適當の教科書でした。寺小屋以上の學校となると、漢學塾です。私の郷國では富饒の家の主人が學殖のあるに任かせて家塾を開いた家が可なり方々にあつた。或は茶封家が學者を自宅に聘して自家の子弟と共に近隣の少數の兒童を教へた例もあります。藩にも學校がありました。主として主族の子弟の學ぶ所でした。

私自身の事を申すと、最初は今日の所謂家庭教師に就いて素讀を習ひましたが、寺小屋に通つたこともあり

故に互に各、その家を愛する心を尊重するやうに、相互にその國を愛する心を是認し、尊重すべきである。これが國際的良心ともいふべきものである。かくしてこそ萬邦協調して、世界文明の上にその特色美を競ふ事ができるのである。

(公民道德)

一八 今

市 島 春 城

私はいくら字書を繕いて見ても「今」といふ字より、以上の力強い字を発見する事が出来ない。古來の賢哲能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つて

市島春城
實業家、元新聞記者、
名は謙吉、新潟縣の
人、萬延元年生。

も「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれ七首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみ。昨日は去れる「今」であり、明日は來らんとする「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは唯「今」のみである。日月は移り、動物は代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移して行く「今」こそ宇宙の本體である。

これを我等の日常に見るも「今」といふ瞬間程大切な時はない。事の成るのも敗れるのも「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振ひ起す力がある。「今」の外に既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟既往は「今」の葬られた殘

骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは、死兒の年を數へる様なものであり、まだ生れない來年を語れば、鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根強く迫り來る力は「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの、偉なるものがあつたとしても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの、偉なるものを求めようと欲したならば、「今」これを爲す外はない。

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道に背くものである。これを未來に期すと言ふ如き

は、永へにこれを失ふと言ふに同じい。特に未來といふ別境地の存するのではない。「今」——現在の推移……これやがて未來である。未來に期すと言ふのは畢竟薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虛を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

故に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於て始めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競争場裡に立つ事は難い。闘は「今」である。勝敗は「今」

の一瞬にある。「時は今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

昔、黒田如水は豊太閤の偉業を思つて、或時問うた。「殿下の成功には必ず秘訣があるではありませんか。願はくはそれを承りたい」と。豊公は笑つて、「別に秘訣はない。唯過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不乱に爲したに過ぎぬ」と答へたとあるが、豊公も「今」の禮讚者である事が知れる。英雄豪傑の事業も「今」の成功の

積まれたものであるのだ。

私は「今」といふに困んで、更に茶人千宗旦の一遺事を語らう。

宗旦が新に茶室を建てたをり、豫て別懇の大徳寺の名僧清巖和尚が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて来た。宗旦は悦んで迎へ、「普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい」と言つた。清巖は「いかさま尤ものことだ。しかし、何ぞ好みはないか」と問うた。宗旦は暫く考へ、「古語に『懈怠比丘期明日』とあるが、いかにも面白く思ふ」と言ふと、清巖はうちうなづき、「成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を

千宗旦
父宗淳に茶道を受け
てこれを善くした。
號は元伯または元叔
萬治元年(三八年)歿
年八十一。
大徳寺
今京都市上京區紫野
にあり。臨濟宗大徳
寺派の本山。
清巖和尚
大徳寺の住僧、近江
の人、書畫を善くし
た。寛文元年(三三三
年)歿、年七十四。

『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮毫しよう」と言ふと、宗旦はひどく悦んだ。さて種々の物語に時も移つたので、清巖が暇乞して去らうとする。宗旦は引留め、「今此所で額字の御揮毫を」と需めた。すると和尚「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう」と言ふのを、宗旦「然様にては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、即座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張残りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。をりから傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひますなら」

と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。
これが千家に名高い額面である。

清巖が揮毫を果して歸院すると、程なく宗旦から使があつて、「茶を進ぜたう御座いますから、只今すぐお出を願ふ」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開の茶を點てた。その日を越さず即日茶をふるまつた所に、宗旦の趣向があるの
で、今日庵といふ以上は、かくなければならぬと、清巖も感に入つたとの事である。

市街の早稲田演劇の様子
又、高瀬の早稲田演劇の様子
市街の早稲田演劇の様子
又、高瀬の早稲田演劇の様子
市街の早稲田演劇の様子
又、高瀬の早稲田演劇の様子
市街の早稲田演劇の様子
又、高瀬の早稲田演劇の様子

贈書
其の談話館ありて并に築き置
於ては善き方とて義の方と
誦すべしと云ふ志の副ハを
物儀中へいれし何れと云ふ
果ッば生かすべしと云ふ
平本多田の早稲田演劇の様子



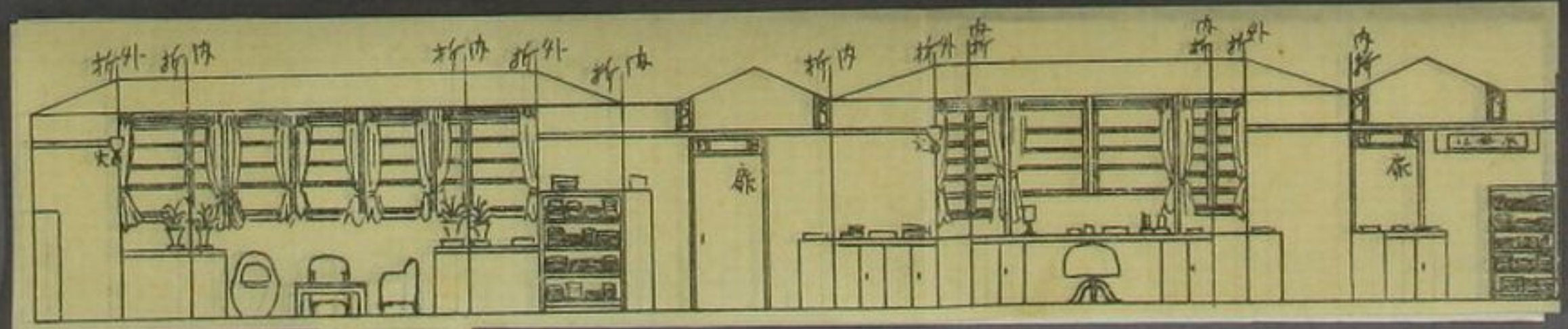
大東亞の胎動
 柴田賢

大東亞の胎動は、十六世紀初頭の、オランダの東洋航路の発展に起因する。オランダは、この時代に、東洋の香料を求めて、インド洋に航路を開き、香料の産地であるモルッカ群島のアンボイナ島に据り、この島を、香料の主要な産地として、その勢力を伸張した。このアンボイナ事件は、オランダとポルトガルの勢力を争つたが、ポルトガルの勢力を削る一方、オランダの勢力は益々伸張した。このアンボイナ事件は、オランダの東洋航路の発展に起因する。

十九世紀初頭、オランダは、東洋の香料を求めて、インド洋に航路を開き、香料の産地であるモルッカ群島のアンボイナ島に据り、この島を、香料の主要な産地として、その勢力を伸張した。このアンボイナ事件は、オランダとポルトガルの勢力を争つたが、ポルトガルの勢力を削る一方、オランダの勢力は益々伸張した。このアンボイナ事件は、オランダの東洋航路の発展に起因する。

大東亞の胎動
 柴田賢

十九世紀初頭、オランダは、東洋の香料を求めて、インド洋に航路を開き、香料の産地であるモルッカ群島のアンボイナ島に据り、この島を、香料の主要な産地として、その勢力を伸張した。このアンボイナ事件は、オランダとポルトガルの勢力を争つたが、ポルトガルの勢力を削る一方、オランダの勢力は益々伸張した。このアンボイナ事件は、オランダの東洋航路の発展に起因する。



英國の東亞侵略第一步地圖



ここに掲げた地圖は西紀1665年（皇紀2325年、寛文5年、鎖国後31年）の日附ニコラス・コムバーフォードの署名がある英國地圖である。南洋一帶の地形が比較的正確であるのに比し、日本、支那、及びニューギニアとオーストラリアの關係等は明らかになされてゐない。東するに従ひ、また北するに従ひ次第に不正確となつてゐるのだ。もつて南洋が如何に彼等に重視せられてゐたかが察せられよう。1665年といへば、英國がオランダとの争闘に敗れ、一旦後退した時代である。しかも、執念深い英國は、世界の寶庫たる南洋の制覇を斷念することなく、百餘年の後、遂にこれを達成したのである。この地圖を觀覽してゐると軌揚なる英國の國民性がひしひしとわれ等にも感ぜられる。ジョンブルの忍耐強さ、われ等はこれを失念することなく、その徹底的な擊破を期さねばならぬ。

大東亞の胎動

柴田賢一

わが南方共榮國が、植民地化への第一歩を踏み出したのは、十六世紀初頭のことである。一五〇九年（皇紀二二六九年、後柏原天皇の御宇、永正六年）インド總督となつたポルトガルのアルフォンソ・アルブケルケは、一大船隊を組織してインドを通過、マラッカを越えて南洋に入り、直ちに當時海上交通の要衝であつたマラッカを奪取した。これが、西歐人による最初の南洋占領である。このときまで、われ等と血を同する南方諸民族は、それぞれを王とし、長を長とし、豊かなる天與の資源に包まれて夢圓らかなる生活を営んでゐたのである。が、忽ち、その生活は覆され、隨つて侵入し來る西歐人のため、花園は蹂躪されたのだ。

ポルトガルの南端を迂回して、インドに到着したものは、ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマであるが、彼が海路をばる幾多の危険を冒して未知の世界に侵入した目的は、東洋の特産とシバング（日本）の黄金を直接入手せんがためであつた。東洋の特産とは、南洋の香料類、珍木、寶石、支那の木綿、絹等の類であり、殊に肉豆蔻、丁香、胡椒などの香料類は貴重品中の貴重品として、西歐人が最も珍重したのである。周知の如く、インドは世界の寶庫ではあるが、當時の西歐人が目的とする諸物資の主産地ではなかつた。アルブケルケは、東洋の物資を自らの手で奪はねばならぬ。その上、東方にはシバングなる黄金島があり、路上には砂金を撒き、黄金をもつて歸國を謀りてゐるといふ。これも侵襲せねばならぬといふ野心を抱いて、東へ船を進め、忽ちにしてマラッカを奪ひ取つたのだ。

だが、なるほどマラッカが香料貿易の中心地であつたが、生産地ではなく、更に東方のモルッカス、バング諸島こそ、その主産地であることが明らかとなつた。目的は近きにあり、と勇み立つたアルブケルケは、マラッカ海峡を越えて、ジャバワ海に入り、種々の困難に堪えてモルッカス群島のアンボイナ、テルナテ等の島々に到達してポルトガル國旗を樹て、なほジャバワ、マラタ、スマバワ、フロレス、ティモールからニギニア方面にまで到り、南洋群島に對する幾多の知識と、貴重品を満載して歸途に就いた。かくの如く、ポルトガルは第一回の南洋進出から大成功をおさめ、これに味を占めて第三回、第三回と續々貿易探險隊を南洋に送り、忽ち南洋一帯に強力な勢力を築き、夥しい利益をあげたのである。

スペインは、當時ポルトガルとならんで二大海洋國であつたから、ポルトガルの南洋進出に對し、獎勵の念禁じ難いものがあつたが、直接南洋へ進出できない事情に置かれてゐた。といふのは、スペイン、ポルトガル兩國が對等ななべて新世界進出を開始すると、各地ではげいに植民地奪取競争を起し、その争ひの熾烈をローマ法王ニコラ五世に仰いだ。ニコラ五世は大西洋の真中に南から北へ一本の線を引き、この線より西で発見したものは、總てスペイン領であり、東側で発見したものは、總てポルトガル領であるとの裁断を下した。南洋は、この線の東側へ進んで到達したのであるから、スペインが如何に羨しく思つても手が出なかつたわけだ。



アユチアの日本人町

然るにすでに地球の球形であることは一般に信ぜられたところであり、ポルトガルのサブローザ生れのフェルディナンド・マゼランは、スペイン王に獻策して香料の主産地であるモルッカス群島へ行くには、東廻り即ちインド經由によれば遠いが、西廻り即ち

大西洋經由によれば遙かに近距離にあり、スペインはよろしく西廻りによつてこの世界の寶庫に到達すべし、と説いた。スペイン王はこれを容れマゼランは西紀一五一九年八月十九日五隻の船を率いてスペインのセビリア港を出帆した。ポルトガル生れのマゼランが、いはば敵國ともいふべきスペインのために忠誠をつくす事は、われわれ日本人の常識では判断できないところであるが、その頃の西洋にはザラにあつたこと、スペインのために奮起したコロンブスは、イタリヤ人であつたし、英國王に忠誠を盡したカボットもまたイタリヤ人であつたし、オランダのたぐひしたヘンリー・ハドソンは英國人であつた。

アジアとアメリカとの間に茫漠たる太平洋が横たるとも知らぬマゼランは、名狀し難い困難を擧げた後太平洋を横断し、先づマリアナ群島の一つグアム島に到着し、西へ進んでフィリピン島のミンダナオ島に到り、その東岸を辿つてヒタチン水道よりセブ島に達して錦を下ろした。セブ島にはマゼランと呼ぶ大酋長が居り、中部フィリピンに絶大の勢力を振つてゐたのである。マゼランはマゼランの命を率じてスペイン王に忠誠を誓ひ、附近の島々の酋長も多くこれになつたが、ただ一人セブの對岸にある小島マクタン島の酋長ラップラップは、頑としてマゼランの麾下に屬することを拒絶した。マゼランは、スペイン人の精強と最新式武器の威力を示すこの時なりと勇躍して討伐に赴いたが、原住民軍の抵抗意外に強く、遂にラップラップが放つた矢のために致命傷を受けたのである。時に一五二二年。

「一五二二年フィリピン群島はマゼランによつて発見された」と西歐の歴史書には記されてゐる。しかしながら、これは事實を歪曲した西歐第一主義的な記事である。スペインよりも日本人の方が遙かに早くフィリピンに進出してゐたのである。このことは、彼等自ら認めてゐる。バユクスミスは、「一五七一年までマラタ市は未だ建設されなかつた。一五六七年、レガスピがスペイン王に奉りて報告し、早くも日本人及び該島に於ける日本商賣の事について記述するところあり。その貿易はおもに陶器と桑絹にありと云はれる。……日本人はスペイン人の來りしとき、ラダナ地方に廣布し、更に南カマリナス地方に向つて進みたり。恐らく内地に定住して島人と結婚したりしならん」と述べてゐる。その地理的位置から言つて、フィリピンに交渉を有したのは日支人であつたことは明瞭で、フィリピンはマゼランによつて発見されたといふ代りに、西紀一五二二年マゼランの漂着以前、すでに日支人によつて発見されてゐたが、マゼランの來着によつて正式に知られたが西歐人の知るところとなり、その後スペインによつて軍事的占領が行はれた」と訂正されてゐる。

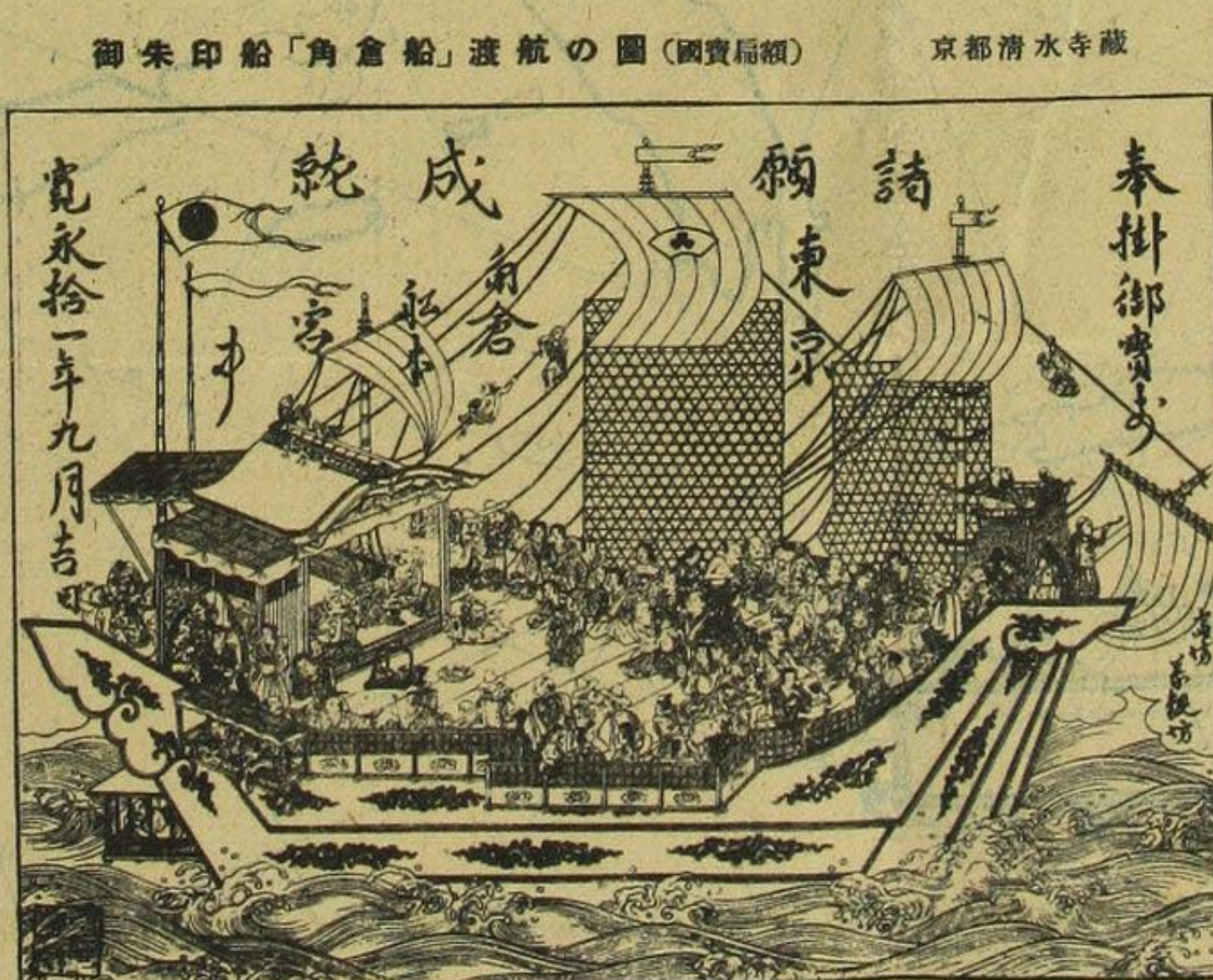
また、アルフォンソ・アルブケルケがはじめてマラッカに着したとき、すでに同地には、ゴレ一人と呼ぶものが住んでゐた。アルブケルケ記には、「マレ人は好談で、一般に無信義であるが、ゴレ人は常に信義を守る。何故ならば、ゴレ人は自らを高貴な種族とし、よき習慣を有するが故に、彼等と通商をなし得るものは、大なる光榮である」と考へてゐると記されてゐる。このゴレ人はわが沖繩縣を指すといふのが一般の定説となつてゐるが、その記された風俗といひ、氣概といひ、單に沖繩縣ばかりでなく、九州、四國、中國等の日本本土からも勇敢な先驅者達が、南洋一帯を跨ぎかけて、西歐人の渡航前、濠洲の活躍をなしてゐたものと考へて差つかへない。平安朝末期、或いはそれ以前から、日本人の生活必需品の中には、南洋の諸物資が入つてゐた。これ等の諸物資は、支那を中継とし、或いは直接の取引によつて、わが國へと招來されてゐたのである。

元來日本人と南洋一帯に居住するマレ一人との間には人種學的に密接な關係の存することは明瞭であるが、たゞ日本人の主流が何であるかは、學者によつて見解が相違し、あるものはアジア大陸から朝鮮を経て對馬海峡を渡つて九州に達したといひ、またあるものは、南方から黒潮に乗つて渡來したといふ。その主流が何れであるかは學者の研究に委ねるとして、恐らく大和民族はこの兩方面から渡航した民族が合流し、渾然一帯となつて形成せられたものに相違ない。されば、今日日本が南方へ向つてゐるのは、いはばその故郷へ歸るのである。われ等は南方と血によつてつながれてゐる。米、英、蘭等が擧取のため、支配者として僅々數百年前進出したのは根本的にその類を異にする。

さて十六世紀初頭にはじまつたポルトガルとスペインの南洋支配は、およそ百年つゞいたが、兩國を王座より蹴落さうとするオランダと英國の豫謀に遭つて、忽ちその支配権を喪失してしまつた。十七世紀初頭、英、蘭兩國は相ついで東インド會社を組織して南洋の經營に乗り出し、スペイン、ポルトガルの勢力を驅逐する一方、兩國必死に争つたが、建國日なほ淺く、新興の氣に燃え立つたオランダの攻勢はなかなかに強く、一六八八年十二月三日英國をジャバワより追放し、一六九三年には香料の主産地であるモルッカス群島の一つアンボイナに住んでゐる英國人、ポルトガル人を多數虐殺した。この事件の捲添を喰つて、およそ三十名の日本人が虐殺されたのである。これにアンボイナ事件といふのであるが、このアンボイナ事件を契機として英國は一旦南洋から身を引き、専らインド經營に力をいたし、オランダは南洋一帯に覇を成したのである。

この英國、オランダ進出時代に積極的な日本人の南方進出が行はれた。八幡船を先驅とする中世日本人の積極的海外發展は、不世出の英雄豊臣秀吉が、天正十五年（西紀一五八七年）豊後國高田の方針を確立し、翌天正十六年七月八日には「給人、領主等油斷して海賊の輩のその領内にあるに於ては成敗を加へ、曲事の在所、知行以下未だ被召上事」を嚴命し、文祿元年大明征伐の大業を肥前の名護屋に進めたとき、朱印狀を京都、堺、長崎等の富商に與へ、海外貿易の特許狀とするに及んで、年毎に盛んとなり、朱印貿易に従ふもの京都、堺、長崎等の商人はもとより大名、幕吏に及んだ。

渡航地は、安南、暹羅、天南、迦知安、大泥、田、摩、交趾、西洋、東京、密西耶、高砂國、東埔、呂宋、占城、信州、順化、摩利加など今日の南支那からインド支那、マレー半島、タイ國、フィリピン、ボルネオ、ジャバワ、セレベス、スマトラ等南方共榮國一帯に達した。しかしして輸入品は、鐵砲、生絲、絹織物、毛織物、木綿織物、犀角、龍腦、胡椒、胡椒、沈香、白檀、黒砂糖、葡萄酒、鉛、金、硝石、硫、水銀、錫、磁器、象牙、檀香、胡椒、鹿皮、鹿皮など、輸出は、銀、銅、鐵、日本刀、蔴、屏風、藥物、日本の衣服、磁器、扇子、傘、食料品などであつた。



角倉了以は徳川初世における京都の貿易商豪土木家。名は光好、通稱與七、のち了以と改む。慶長九年（一六〇四年）より同十八年に至る間、毎年朱印狀を受けて巨船を發し、安南、東京に通商貿易を營んだが、角倉船はその貿易船である。

なほこの時代には、フィリピンのマニラ、ジャバワのパタヴィア、タイ國のアユチア、パタニ、安南のツラン、ファイホー等の主要地に「日本町」なる居留地をつくり、數千、或ひは數百の日本人が集團生活を營んでゐた。アユチアにおける山田長政、木谷彌左衛門等の活躍は、多數の日本人を背景としてなされたのである。しかるに、これ等日本人の發展も、寛永十一年、同十三年に發布された海外渡航禁止令のため、安南にジャバワに或ひはマニラに幾多の苦難を強いられた。あたふた散逸消滅したのだ。領國令に就ては幾多の功罪論があるが、徳川氏が自己政權を永久ならしめんがために、不韋のわが國民を強引して孤島の生活に入らしめた罪は斷じて看過するわけには行かない。日本が天來の使命を放棄し、時代の彼方に取られざるうちに、列國は漸々とわが南洋に、否、大東亞全境に侵略の魔手をのびしてゐたのである。

一旦オランダとの争戦に破れた英國はインドに退いて専らその經營に従ひ、オランダの勢力往年の如からず十八世紀の後半より、再び精力的に南洋進出を開始し、忽ちにしてマレーに、支那にボルネオに、太平洋諸島に強力な勢力を築き、二十世紀初頭に及んで列國の強者は定まり、ここに至られた南洋地圖は描き上げられたのである。しかし今や、この地圖は、天の機に投じられたわが國の運業によつて完全に是正されるに至つた。

富山房の今昔

市 嶋 春 城



富山房書店が今度改築されて立派になつたに就いて、其の創始時代を思ひ、更に進んで其の前身東洋館書店時代に思を馳せると、真に今昔の感に堪へないものがある。東洋館書店は吾等の兄事した小野梓君の経営に係つたもので、東洋館の名は梓君の雅號其の物である。維新後學者の手で、公然書店を出したものは、前には福澤先生の福澤屋があり、後には小野君の書店がある。小野君の主張は文化を裨補するには書店よりも大切なものはない。併し文化の機關としての書店は、良書を選んで賣らねばならぬ、自から良書を出版せねばならぬ、そして暴利を貪つてはならぬと、小野

君はこれをモットーとして書店を開かれた。丁度其の頃小野君が友人大内青巒氏に寄せられた長文の書簡を、自分は所持してゐるが、開店の趣意が斯く書かれてゐる。小野君は其の理想を「利他即是自利」の六字に縮めて、それを書店常用の印の周圍に刻された。流石に學者の經營に成る書店の標榜は堂々たるものであつた。店はやはり神保町にあつたと記憶するが、餘り大きい店では無かつたが、書架には立派な洋書が滿ちてゐた。其の頃丸善の外に洋書を賣る店は無かつた（古本の洋書を賣る店はある）。小野君の店の洋書は皆店主自身の選擇で、外國から輸入したものであつて、頗る良書に富んでゐた。東洋館からも五七の書物が出版されたが、それは皆小野君の自信のあるもの、みて概ね帝大新進の高田、坪内、有賀、天野等の著譯に係るもので、小野君自身の著述もあつた。小野君は周密勤勉の人であつて、書店の裏座敷に毎日座を占めて、自から簿冊を取扱ふ傍、こゝで著述をしたり校正をしたりして、一日の勘定が済まねば退却しないことが例であつて、夜分九時頃まで事務を見られた。自分なども度々君を此の一室に訪うたことがあるが、晩食頃に行くと、自から牛肉二片を火鉢であぶり、二三片の麵麩で食事を辨せられることが常であつた。斯く勤勉の經營であつたが、不幸にして失敗に了つた。必竟君の理想は較々高過ぎたのと、君の健康が事業の持續を許さなかつたからで、如何にも残念の事であつた。

8 2
33
48
富山房

併し小野君は歿後自家の理想を實現するに上乘の後繼者を得た。斯る事業には小野君よりも寧ろ適任である人を得た。而かもそれが小野君の學僕の中から出た。其の人は即ち富山房社長坂本嘉治馬氏である。書店の名は富山房と改まつたが、氏は百難を排して君の遺業を守り立てた。但し一時はなかなか困難であつたに相違ない。此の困難時代には、梓君の義兄小野義真氏が資金を助けられたと思ふが、神保町邊では富山房を書店と思はず、小野義真さんの妾宅であらうなど、想像した。と言ふのは、看板が普通の標札の如く小さく、そして富山房を富山房と讀んだからこんな間違も生じたのである。併し富山房は追々大なる發展をなし、間もなく第一流の書店となつた。自分は長い間此の書店に關係があるが、忘れ難い重大な關係は、大日本地名辭典の出版である。著者文學博士吉田東伍氏は自分の姻戚で、日清戦争の時新聞記者として軍艦に塔乗し勸戦の上無事歸還したので、此の著述を思ひ立ち、初めは自分の如き不如意の者が援助したものである。併し此の編纂は頗る大事業で到底自分の微力では支へ切れず、遂に坂本氏の手に移したのが、そも／＼此の大著の完成した所以で、當初の計劃は三四年を費せば完成し得る規模であつたが、追々規模が擴張されて十三年の歳月を費し、漸く完成を告ぐるに至つた。吉田博士も稀有の勤勉家であつたが、坂本氏が十三年一日の如く冷熱なく、著者の欲するがままに委せられたことも其の當時の稀有の例で、自分は感激に堪へないものがある。吉田氏が

博士の學位をもち得たのも、史界に大名を馳せたのも、全く此の辭典の出版に據るものである。富山房では追々不朽の辭典が多く出版されてゐるが、恐らく最初の辭書の出版はこれであらう。辭典の編著は一朝一夕に成るものでなく、多くの歳月を費すものであるから目前の利を見るもの、企及し難いもので、克己堅實、坂本氏の如き人を得て始めて成るものである。氏が良書を得る爲には渾身の力を注ぎ、撓まず屈せず、どこまでも遣り通す根氣の強さに至つては、小野君の遺訓を徹底的に守つて遺憾ないと言つてよからう。坂本氏は良書を出版する點に於ても、暴利を貪ることなく可及的價を廉にして流布を廣くする點に於ても、小野君の理想通りで、故人が斯る繼承者を得たのは、ひとり小野君の仕合のみでない。自分は東洋館時代に思を馳せて小野君を追憶し、若し君在さば今日の此の隆盛の書店を見て如何に喜ばれるであらうかと、新築を見るにつけ轉た感懷を禁じ得ないのである。

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written on a piece of paper pasted into the notebook. It begins with a large initial 'S' and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of 18th-century handwriting.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written on a piece of paper pasted into the notebook. It begins with a large initial 'S' and continues with several lines of text. The script is dense and characteristic of 18th-century handwriting.

權虎手簡同抄卷分事一

一 某宗の事を如何に記述せしむるに在りて其の意を以て
考ふるに其の動静を知るに

一 信行の事は其の事とて其の意を以て其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

一 権虎の事は其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

一 權虎分國下の事は其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

一 權虎分國下の事は其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて
其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

の奪り信じておられ居る様

一信所 此の如く申すは忠義村に於ては因井三
清津に外信國に於て是の如く申すは龍虎分國に外
信國に於ては如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは

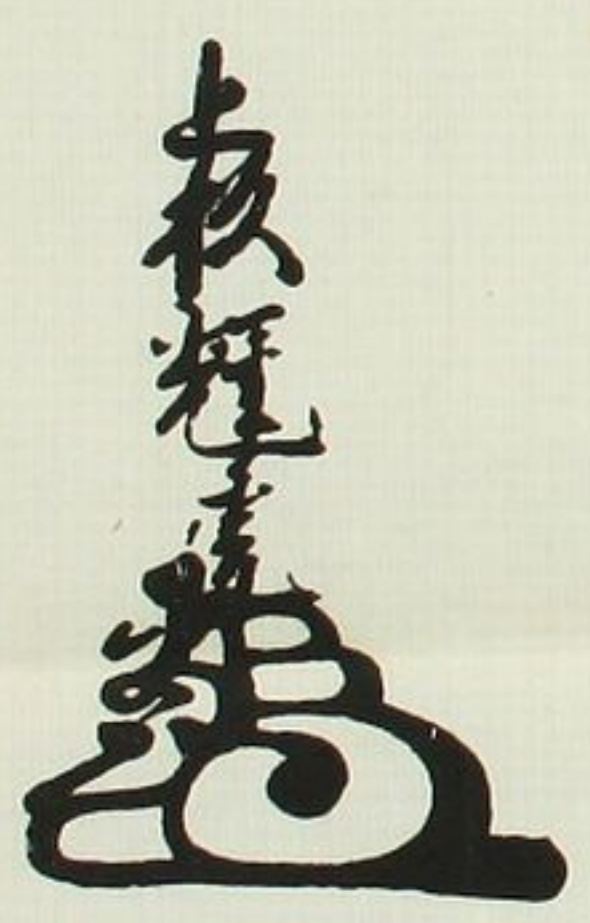
一越中より神護の事之を神保推長より之を如く
申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは

一以後の事之を如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは

一交事

一龍虎分國より申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは
如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは如く申すは

永祿七年下二月廿日



龍虎
御書前

龍虎寺勸同の巻分第一

一 某素の事は勸同の巻分第一、一 長安國素高伏
の素集は勸同の巻分第一

一 信所 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、

一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、

一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、

一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、
一 勸同の巻分第一、一 勸同の巻分第一、

我國職人の好むもの中、一、角を方角に
代り、母を本國職人の正法に傳へ、又、
花分をいふ事

一、越中、少許、澄々、半之、名、種、保、推、表、り、
乃、其、見、ん、傳、大、主、也、門、の、推、表、者、一、
二、又、少、目、尸、命、
昔、尾、山、の、少、妻、也、子、也、
之、
此、分、を、いふ、事、
一、此、分、を、いふ、事、
花分をいふ事

一、後、事、之、有、り、
料、下、一、
交、事、

一、種、虎、分、園、よ、か、り、
世、様、公、種、虎、分、
傳、之、
乃、の、通、
之、
此、分、事、
種、虎、分、事、

永祿七年下二月廿日



種、虎、分、事、

おらんだ展覽會出品目録

主催 文 明 協 會

東京牛込早稻田三四(電話牛込三五四二)

會期 昭和十五年二月一日から十一日迄

東京日本橋白木屋に於て

後 援

和 外 海 文 拓 日
蘭 務 部 軍 務 公
使 務 省 省 省 省 館
東 京 朝 日 新 聞 社
日 蘭 協 會 省 省 省 省

おらんだの概観
地形、気候、人口、産業、交通、貿易、政治、外交、植民地、民族

おらんだを代表する名畫

おらんだの現況
和蘭略年表

おらんだの貨幣
和蘭内及植民地貨幣
オランダ地圖(一九四四年刊)

おらんだの食器

東京美術學校藏

矢代幸雄氏藏

山鹿義教氏藏

板澤武雄氏藏

堀田伯爵家藏

蘭 醫 學

醫學がもたらせた以前に知り得た内臓圖
明和八年三月四日紀元二四三一年小塚原刑場に於て
前野良澤杉田玄白等死刑囚を解剖させ蘭醫學の正確
なるを驚嘆する圖
解體新書 杉田玄白撰 安永三年刊
クルム解體圖譜(蘭譯本) 一七三四年刊
バルムン解體圖譜 一七〇〇年
重訂解體新書銅版全圖 十三冊
醫範提綱附圖 文化五年刊 本國は亞細亞の諸國に
醫學提綱 宇田川 著 依り種類版の最初のものに
醫學提綱再刻本 宇田川 著
醫學提綱 明治二十三年刊 杉田玄白著 一冊
リセランド人身解剖學 蘭譯本 一八二六年刊 一冊
醫學概要 高野長英著 大保三年刊 一冊
人身解剖學 蘭譯本 一八三九年刊 一冊
病學通論 緒方洪庵著 嘉永二年刊 一冊
コンスブルッフ病理學總論 蘭譯本 一八一七年刊 一冊
西説内科選要 寛政五年刊 宇田川棟園撰 一五冊
因液發備 吉雄辨著
扶氏經驗遺訓 フーランド 蘭譯原書一八三八年刊

岩波 浪剛氏藏

大澤 三郎氏藏

岡村 千曳氏藏

藤澤 剛富氏藏

緒方 浪剛氏藏

同 緒方 浪剛氏藏

同 緒方 浪剛氏藏

同 緒方 浪剛氏藏

高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(二十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(三十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(四十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(五十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(六十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(七十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(八十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(九十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第一卷(一百) 一冊

高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(二十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(三十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(四十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(五十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(六十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(七十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(八十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十一) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十二) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十三) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十四) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十五) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十六) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十七) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十八) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(九十九) 一冊
高橋新市編 蘭學叢書 第二卷(一百) 一冊

MARUZEN
STATIONERY DEPT.
No. 100
PRICE

昭和十四年九月三日現在

爆弾下の 歐洲要圖



MARUEN
STATIONERY DEPT.
丸房文藝社

No.
PRICE ¥0.80

1919

